
新総統の野望

ルンメル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

新總統の野望

【Nコード】

N0992Q

【作者名】

ルンメル

【あらすじ】

第2次世界大戦の時代から分岐したパラレルワールドのひとつに、違う歴史を歩む未来に生きた日本人が転生して、ドイツの總統として第2の人生を歩み始めた話。

注意、妄想を垂れ流しています。
更新は不定期です

第1話、プロローグ（前書き）

この作品はパラレルワールドの世界を描いたフィクションであり、この世界の過去、現在、未来とは関係ありません。

尚、作品は主にWikipediaや資料を参考に、想像力で作られることと、架空のオリジナル人物が多々出現すること都合小説であると、ご理解下さい。

また、本作は随時改訂をしています。 ついでに基本方針はユーザー情報にあります。

それから、えーと、楽しんで頂ければ幸いです。

第1話、プロローグ

1941年、6月22日未明、ドイツ第3帝国を率いるアドルフ・ヒトラーは、バルバロッサ作戦を発動し、ソビエト連邦に対して奇襲攻撃を敢行した。

バルバロッサ作戦は冬までに北はレニングラード、中央部は首都モスクワ、南はウクライナの資源地帯を同時に攻略する壮大な侵攻計画である。

当然、必要な兵力も膨大であった。

開戦当初だけで戦車3800輜、航空機2千機、兵員300万人以上に上り、これに加えて損害の補充や増援部隊も次々投入されていくのだ。

この大兵力を投入したバルバロッサ作戦の過程で、枢軸軍はそれに見合う、数多くの大戦果を挙げた。

しかし、ドイツ軍の勢いは秋の泥濘期によって鈍り、その間にソ連軍に体制を立て直されてしまう。

そして、例年より早く訪れたロシアの冬將軍の中、ヒトラーは第2、3、4装甲集団を中核に据え、モスクワ攻略を目指すタイフーン作戦を強行する。

だが、この年のロシアの冬は、例年より早く始まっただけでなく、大寒波を伴っていた。

氷点下40度を下回る想像を絶する気温の中、ドイツ軍は冬季戦

の装備不足から凍死者を続出し、多くの兵器も運用できずに、疲弊していく。

この最悪な状況に前線の指揮官達は、撤退要請を繰り返したが、それをヒトラーは拒否し、ただ前進せよと命じたただけだ。

やがて、その無理な戦争指導により、モスクワの手前で戦線は崩壊寸前に陥る。

その危機に対して、ドイツ軍の指揮官達は、ヒトラーの命令を無視することで乗り切ることを英断し、無断撤退を開始した。

ここにモスクワ攻略を目指したタイフーン作戦は失敗に終わり、同時にバルバロッサ作戦も潰えたのである。

しかし、それで戦争が終わるわけではない。

この後も氷点下を遥かに下回る厳しい環境の中で、ソ連軍とドイツ軍の死闘は続くのだ。

特にドイツ軍をの苦難は、撤退戦を始めてから、より大きくなったのかもしれない。

攻勢限界点に達した枢軸軍に対して、ソヴィエト赤軍の大反攻が始まったのが12月5日のことである。

寒さに慣れたソ連軍の激しい追撃で、撤退するドイツ軍は多くの犠牲を強いられた。

それでもドイツ軍の3個装甲集団は、優れた指揮でその追撃を振

り切りことに成功する。

ただ、ヒトラーはこの無断撤退を許さず、バルバロッサ作戦の失敗の責任を軍に押しつける形で、多くの有能な指揮官が解任された。

この中には装甲部隊の父である第2装甲集団司令官グーデリアン上級大將や、第4装甲集団司令官フォン・ヘプナー上級大將、中央軍集団司令官フォン・ボック元帥もいる。

そして、ソ連軍の反撃は大半の戦車部隊を失ったドイツ軍中央軍集団に対して継続され、特に第9軍は激しい攻撃に晒された。

その後、12月末までにソ連軍は第9軍に対して、圧倒的優位を確立し、その北に展開するドイツ北方軍集団第16軍に目を向けた。

大寒波が続く42年1月7日、ソ連軍は北方軍集団に対して、新たな反攻作戦を開始する。

勿論、この間も各地で、ロシアの凍てついた大地で、ドイツ軍とソ連軍の死闘は続いていたが、それでも北方軍集団に取っては青天の霹靂だった。

ソビエト赤軍の大攻勢の最初の一撃は、第16軍の北部を担当する第10軍団の戦線を簡単に破った。

ある意味当然かもしれない。このイリメニ湖南方にいる始まったソ連軍の攻撃には、北西正面軍だけでなく、赤軍最高司令部の2個衝撃軍が投入されたのだ。

この攻撃は明らかに、第16軍の生命線の東西に伸びるスターラ

ヤ・ルーサの鉄道線の制圧と、そこから伸びる補給線の遮断、そして第16軍の包囲を狙って行われていた。

ただ、天候の悪化と雪の影響で、その後のソ連軍の進撃は遅延し、鉄道線上を西進する過程で、ドイツ軍に防衛線の再構築を許すことになる。

ソ連軍最高司令部は、そこで第16軍の南部で攻勢に出ているカリニン方面軍に注目したようだ。

カリニン方面軍は、中央軍集団第9軍に対するルジェフ・ヴウジマヤ方面の攻撃を成功させ、その向背を浸食していた。

ソ連軍はカリニン方面軍の戦域にいる第3、第4衝撃軍を、第9軍に対するルジェフ方面の攻撃だけでなく、その西方のトロペツ・ホルム方面への攻撃を同時に行なわせたのだ。

この中央軍集団第9軍北部での攻勢は、当然北方軍集団第16軍に対する、南からの攻撃に繋がるものとなる。

この戦況では北方軍集団司令官ヴィルヘルム・フォン・レープ元帥としても、戦線の安定の為に戦略的後退も考慮に入れるしかない。強力な南北からの挟撃で第16軍が包囲殲滅されかねなかったからだ。

だがベルリンからくる指令は、あくまでも占領地の死守命令だけである。

ここでもまた、撤退を巡り、度重なるヒトラーとの対立があり、

レープ元帥が解任されてしまう。

そして、1月17日、北方軍集団は新たな司令官となったゲオルク・フォン・キュヒラー上級大將を迎えたのだ。

彼もまたレープ元帥と同じ意見の持ち主であった。

だが、ベルリンから来る占領地の死守命令を無視するにしても、既に手遅れの感は否めなかった。

何故なら、冬將軍に馴れているソ連軍の進攻すら遅らせる過酷な気候が、同時にドイツ軍の速やかな撤退を困難にしているのだ。

やむなくキュヒラー上級大將は、突出部となった第16軍の兵站線を確保することに、全力を注いだ。

そして、膨大な兵力を投入したソ連軍もまた、損害をもろとせず、この兵站線を遮断しようとしていたのだ。

~~~~~

そのソ連軍の攻勢を受ける第16軍麾下で、北部を担当する第10軍団に、我が臨時戦闘団は所属している。

ヴァルダイ丘陵北嶺は、大小の湖がたくさん有り、森林と湿地帯に覆われている。

今、私の目の前には、深雪が積もる樹林地帯と、雪に埋もれた平野部を貫く、道路が目の前にある。

強風に僅かな雪が混じる中、先ほどソ連軍の小規模な偵察隊は、風下で待ち伏せをしている我々を見過ごし、西へと続く轍を目安にさらに前進していった。

このソ連軍の偵察隊を叩く役目は、戦友である第30歩兵師団の勇者達に任せることになっている。

我々の獲物はあくまでもソ連軍本隊の待ち伏せであり、主任務はこの環境下における戦場の王様、歩兵を少しでも叩くことにある。

だが、戦車乗りとしての欲を言えば、待ち伏せでソ連軍の主力戦車を少しでも仕留めておきたい。

最近、ソ連軍の重戦車は姿を見せず、軽戦車ばかりで、稀に中戦車のT34が戦線の突破を図る主攻撃に現れるくらいだ。

やがて、雪に偽装された我々の前にソ連軍の軽戦車隊と随伴する歩兵大隊が見えてきた。

やはり、重戦車は疎か中戦車もない。

縦列で前進する敵は、軽戦車であるT26が6輜と装甲車3輜であり、これに主目標の大隊規模の歩兵がいる。

敵は雪に慣れた様子で前進し、我々の目の前にやってきた。

すぐにも攻撃命令を出したい衝動を私は抑え、より効果的な打撃を与える地点に、ソ連軍が進出するのを深呼吸をして待った。

「撃て、撃て、撃て」

緊張で脈が速くなる中、私の声は白い息とともに吐き出された。

すぐに指揮下にある全戦車が、ソ連軍の車列に向かって、一斉に戦車砲を発射する。

周囲に展開している中隊規模の装甲歩兵も、機関銃の連射を始めた。

私が乗車する3号戦車H型も同様で、攻撃命令を聞いた砲手のグレイマン軍曹もすぐに反応している。

我が3号戦車は、80m先にいる敵のT26に対して、既に照準を付けており、命令を聞いた曹長がすぐに引き金を引く。

搭載する42口径50mmkwk対戦車砲から発射された徹甲弾は、T26軽戦車の側面に命中し、装甲を破って破壊する。

最初の攻撃で、ソ連軍の軽戦車は全滅し、それを確認した2号戦車が敵歩兵を掃討する為、20mm機関銃と7.92mm機関銃を連射しながら、ソ連軍部隊に近づいていく。

私が指揮する戦車隊は、僅か15分の戦闘でソ連軍戦車6輜と装輪装甲車3輜を破壊し、敵歩兵約300名を戦死させ捕虜20名を得た。

こちらの損害は歩兵3名の戦死と7名の負傷である。

「全軍深追いはするな。戦車隊は敵を警戒せよ、歩兵中隊は戦利品の確認を急げよ。あまり時間はないぞ」

敵歩兵の撤退を確認した私は、即座に命令を出す。

我々は撃破したソ連戦車などから、食糧、武器、弾薬、あるいは衣類まで使える物を短時間で漁り。

そして、ソ連軍砲兵隊の野砲による制圧射撃を受ける前に戦場を後にしたのだ。

その後間もなくして、そこにソ連軍の砲撃が次々と爆音を立て着弾する。

この間違った場所への砲撃で、私は近くに観測隊や偵察隊がないことを確信し、思わず安堵の表情を浮かべた。

そして、すぐに乗車している3号戦車H型から、後方に待機させていた3号指揮戦車に移乗する。

「フォン・シュトラウス少佐、先ほどから第46歩兵連隊長のベイル大佐が何回も通信を求めています」

独ソ開戦以来、苦楽を共にした通信を担当するハウト曹長の報告に、私は思わずせつかちな大佐の顔を思い浮かべて苦笑した。

すぐに無線通信でベイル大佐に連絡しようとした所、当の相手から通信が入る。

低い声が無線から響く。第30歩兵師団第46歩兵連隊連隊長だ。

「こちらは、偵察隊は撃破した…」

「了解。こちらも任務は成功です」

無線で詳細を話す必要はなく、これで十分だろう。

私が大隊長を務める第1戦車連隊第3戦車大隊は、バルバロッサ作戦に錬成途上のまま、急遽、第1装甲師団に編入された部隊である。

この為、未熟な練度を命がけの実戦で鍛える形になってしまった。その危機を上官や戦友達の支援で、損害を抑えながら任務を果たしてきた。

独ソ開戦時、第1装甲師団は、第4装甲集団麾下第41装甲軍団の所属部隊として、北方軍集団のバルト侵攻を支えた。

その後、第4装甲集団が北方軍集団から中央軍集団に移籍し、タイフーン作戦に参加すると、我々第1装甲師団もまたモスクワを目指したのだ。

この頃には我が第3大隊も、頼もしい熟練部隊に成長していた。

だが、モスクワ攻略の手痛い失敗で、全装甲師団は大打撃を受けながら、撤退することになると。

第1装甲師団もまた、多くの戦力を失いながら何とか後方にたどり着いた。

その直後、比較的戦線が安定していたはずの北方軍集団に、装甲

部隊を派遣することが決まる。

どうやらベルリンの方に、北方軍集団の占領地イリメ二湖南方地帯を、モスクワへの攻撃にあくまでも必要であり、死守するよう叫んでいるお偉方がいたらしい。

その妄執のお陰で悩みが尽きず、焦燥を募らせる参謀本部と陸軍総司令部が、装甲兵力を少しでも北方軍集団に与えたいと考えたようだ。

命令を受けた当時の第4装集団司令官ヘプナー上級大將はすぐに決断したらしい。

よりにもよって、我々第1戦車連隊第3戦車大隊と、1個中隊規模の装甲歩兵を基幹とする戦闘団を北方軍集団に向かわせると…。

さらにその決定で私はその戦闘団の最先任として、指揮を任されてしまったのだ。

そして、当時の北方軍集団の司令官フォン・レープ元帥は、我々をフォン・ブッシュ上級大將率いる第16軍に送り込んだ。

この為、我々は、モスクワに近いイリメ二湖の南方の広大なヴァルダイ丘陵で、第10軍団と共にソ連軍の大攻勢に直面することになったのだ。

## 第2話、プロローグ2

「シュトラウス大隊長、第30師団の警戒ラインに到達しました」  
私が物思いにふけりながら休んでいると、ハウト曹長の報告が入った。

私は3号指揮戦車のハッチを開け、身を乗り出した。

歩兵連隊が樹林帯に沿って、88高射砲や37mm対戦車砲、機関銃を使い、的確で強固な防衛線を作っている。

「連隊本部はどこにある」

防衛線内に入ると真っ先に目についた第46歩兵連隊の士官に私は尋ねた。

中尉の階級章をつけた士官は分厚いコートを着込んでいる割には、きつちりとした敬礼しながら答えた。

「はい、連隊本部はそちらの林の中に偽装しています」

中尉が指し示した方向には、確かにハーフトラックとテントで作られた連隊本部らしきものがあつた。

「ありがとう中尉」

そう言つて私は戦車を降り、第46歩兵連隊の指揮官ベイル大佐に会いに向かった。

ハーフトラックと樹木で強風を防いだテントの入り口に、モーゼルライフルを持った二人の歩哨が寒そうに立っている。

「第1戦車連隊臨時戦闘団のフォン・シュトラウス少佐だ。ベイル大佐に会いたい」

それを聞いた二人の衛兵の内、一人がお待ち下さいと言いながら、テントに入り確認を取った。

「少佐、どうぞお入り下さい連隊長がお待ちです」

天幕に入ると寒さが緩和する。　　：　まあ、少しだけだが

「シュトラウス少佐、入ります」

「おう、フォン・シュトラウス少佐、ご苦労だったな。そこに座りたまえ」

数人の部下を従えたベイル大佐が敬礼に答礼しながら、狭い内部で最も暖かい薪ストーブの脇に座るよう促した。

「ありがとうございます。偵察隊の方は全滅したのですか」

「ああ。戦車砲の砲声が聴こえた瞬間、足を止まめたのが奴らの運のつきさ」

貴重な薪を大佐自ら、次々と足してくれる。

「こちらは何時、第46歩兵連隊が先に発砲音を響くか心配でし

たよ  
」

どうやらタイミングはギリギリだったようだ。

「そうか。互いに運が良かったようだな少佐。それで戦闘で損害はあったのかね」

「こちらは戦死者3名、負傷者が7名出ました」

それを聞いた彼は死者に黙祷をした。

「もちろん負傷兵はすぐに第30師団の衛生大隊が引き受けよう」  
ベイル大佐が部下の一人を、すかさず伝令として衛生大隊に送り出してくれる。

「有難うございます大佐」

「それで、シュトラウス戦闘団の戦果はどうだったのだ」

「我々の戦果は軽戦車6、装甲車3、歩兵300に加え、捕虜20です。大佐」

ストープに手をかざして私は報告する。

「良くやった少佐。何時も通り捕虜は師団の憲兵隊が請け負おう」

第46連隊正面の敵戦車が減り、ベイル大佐は嬉しそうに褒め言葉を口にした。そして気軽に捕虜の収容を引き受けてくれる。

「ありがとうございます大佐」

ソ連兵捕虜は、中央軍集団のモスクワの敗退以来、あまり歓迎されないのだ。

「何、構わないさ。それから残念だがシュトラウス戦闘団は第30歩兵師団から第290歩兵師団への配置替えが決まった」

第290歩兵師団…第8派、フォン・ウレーデ中将の部隊か。

「了解です大佐」

我々は義務を果たすだけだ。

「詳細は後で説明するが、我々の西側にいる第290歩兵師団が防衛線を新たに再構築する間、支援をするようにとのことだ」

ベイル大佐はそう言いながら命令書を差し出した。

「分かりました大佐」

「それから我らがフォン・ティッペルスキルヒ師団長からは、フォン・シュトラウス少佐と戦闘団にくれぐれもよろしくとのことだ」

「ありがとうございます。そう言って頂ければ部下も喜ぶでしょう」

兵科が違うとはいえ、雲の上にいる将官の褒め言葉は嬉しいものだ。

「勿論、我々第46歩兵連隊も、シュトラウス戦闘団には全員が感謝をしているぞ」

私のこぼれた笑みを見ながら、ベイル大佐がやや素っ気なく、つけ加える。

「こちらこそ第46歩兵連隊にはよくしていただきました。有難うございます」

「…まあ、この話は終わりにしよう。これから第290歩兵師団の状況と第16軍の戦況を説明しよう。バイクス大尉始めてくれ」

正直、これはたいへん有難い配慮だ。

師団から独立して運用される我々に取って、情報の入手は遅れやすく、頭を下げて頼み込んで得なければならない場合もある。

「了解です連隊長、少佐もご存知の通り、デミヤンスクは東部全域に加え北部、北西部、南部、南西部がソ連軍の勢力圏に入りました」

「現在第10軍団は突破された地域を囲むように北からまず第81歩兵師団、第18自動車化歩兵師団、南東へ第290歩兵師団、その東に我々第30歩兵師団と順番に配置しています」

地図に記される出っ張った戦線も、徐々に弓なりの曲線の出っ張りが引っ込み、日に日にし字に近づきつつある。

「北部に展開するソ連軍は、西部のスタラヤ・ルーサの街の占領を目指す一方で、主攻を南西へ移しつつあります。」

そこで第10軍団長ハンセン砲兵大将閣下は、デミヤンスクとスタラヤ・ルーサの連絡線を死守する為に、第18自動車化歩兵師団と第290歩兵師団を配置しました。

さらに、それを強化する為、少佐の戦闘団を含む予備兵力の重点投入を決めたのです」

バイクス大尉はスタラヤ・ルーサの街から南東に伸びる補給線を指して説明を続けた。

「大尉、その連絡線は維持出来る見通しなのか」

我々に取って最重要なことはそれだ。

「正直難しいでしょう。まず我々は南部にも強力な敵を抱えています。」

その敵に備える為に、第10軍団は予備兵力である第3SS師団トーテンコップフを、第2軍団に取られました。

このことから第16軍そのものに兵力が不足しているのは明らかでしょう」

大尉は新しい南部の地図を出して続けた。

「今のところ南部の敵は、西進を主軸としています。」

ただ、それを防ぐ第38軍団とデミヤンスクの第2軍団の戦線は伸びる一方で、トーテンコップフだけでは埋められない状況です。

そこで第16軍司令部は、弱体化して再編中のフォン・アルニム装甲兵大将率いる第39自動車軍団を、急遽投入することにしました」

……これで、第16軍に師団規模の予備兵力は無くなったことになる。

「そうか。撤退命令も出る様子はないようだな」

「残念ながら……、最高司令官ヒトラー総統からは、一步も引かずに死守するよう命令がでています」

バイクス大尉はこれまで努めて冷静だったが、流石に不満そうだ。

この状況ではただでさえ補給が困難であり、包囲されては全滅する可能性が高く、撤退するのがセオリーなのだ。

「北方軍集団司令部には参謀総長ハルダー大将から連絡があり、万が一我々が包囲下に陥った場合に空軍が補給を確保することを約束したそうだ」

ベイル大佐はおもむろにテントの上を指し示して続けた。

「あとは、我々が神に祈れば良いだけさ」

大佐はそう言って肩をすくめたが、天を指したのか強風が吹き荒れる天候を指したのか私には分からなかった。

「そうですか。では私も補給線が保つように祈りましょう」

いずれにせよ、今しか祈る暇はないかもしれない。

「天候は我々ではどうにもなりません、第16軍も万が一の空中補給に備え、デミヤンスク郊外で飛行場の設営を急ピッチで進めています」

大尉は上官二人のつまらない掛け合いを見て見ぬ振りをして話を纏めた。

「また第16軍司令官ブツシュ上級大將は、万が一に備えて、突出部に全周防衛の予備体制を取るように命じました。」

最後に、ソ連軍の兵力ですが、捕虜を尋問しても皆目分からないのです。

ソ連軍の師団や軍団などの編制自体、開戦前と今では全く違います。

大半の部隊の所属先が、北西正面軍の第34軍と赤軍最高司令部予備の第1衝撃軍と第2衝撃軍と判明しましたが、その衝撃軍という名も初耳で、敵兵力は全く手探りの状況です」

そう言って大尉は締めくくった。

「戦車の数もやはり、まだ分からないのか」

「残念ながら、あくまでも推測ですが、最大で10輜近いT34と、各種軽戦車が60輜近く稼働していると考えています。」

特に、最初の攻撃以来、姿を消したマチルダ、ヴァレンティン、KV1についてはこの環境に耐えられずに、脱落したと判断しています」

バイクス大尉は、申し訳なさそうに言う。次のソ連軍の攻撃で、第1戦車連隊が身を持って知るところだと思っっているのだろう

それを黙って見ていたベイル大佐が身じろぎした。

「これは我々の師団長の独り言だが」

そして、前置きを言いながら重々しく切り出した。

「撤退命令が出ない以上、今のままでは連絡線どころか包囲される可能性も高い。」

戦闘団はなるべく戦線の西側にいた方が良いかもしれない」

そう言っただけでベイル大佐は薪をストーブに突っ込んだ。

「分かっております。無理はしませんよ大佐。約束します」

これは私の本心だ。ベルリンの暖かいベッドでうたた寝をしているお方が、地図を見て死守しろと叫んだからと言って、何故我々が犬死にする必要がある。

「だと良いがな」ややばつが悪そうな表情を大佐は浮かべた。

「そろそろ部下の所に戻りませんといけません」

そう…部下達は寒い中、車両の整備をしている。私も向かわないといけない。

「そうか。後で食事に何人が招待したいがどうだシュトラウス少佐？」

「喜んで伺います。大佐」

頷いた私は、寒過ぎる外に駐車する指揮戦車に向かった。

### 第3話、プロローグ？

第46歩兵連隊本部から出ると、温まった体はすぐに冷風で冷やされる。

急いで、乗り込んだ3号指揮戦車当には暖房などの余分な装置はない。だが風がないだけでも全く体感温度は違うものだ。

待機していた指揮戦車の乗員の労をねぎらい、すぐに我々は大隊本部に向かった。

こちらにも、歩兵連隊と同様に、ハーフトラックとテントを組み合わせている。

「大隊長、お待ちしております」

既に、戦闘団の副指揮官で、第2軽戦車中隊長フォン・ランゲルト大尉、

その次席に位置する装甲歩兵中隊長カイデル大尉、そして参謀のブルク大尉が待っていた。

装甲歩兵中隊も既に定員を大きく割り込み、主要な装備車両も装甲兵員輸送車が5輦しかなく、後の8台は踏破能力の劣るトラックだ。

「待たせたな二人共。それで負傷者はどうだったカイデル大尉」

私はまず、ヨレヨレのコートを着る歩兵士官に声をかけた。

「はっ、7名の負傷者ですが4名は直ぐに復帰出来ます。ですが残る3名はデミヤンスクの野戦病院に送られることになりました」

「戦死を含めて6名か…痛いな」

「はい、それでも兵の補充は来ないのでしょうか」

カイデル大尉が淡い期待を込めて尋ねてきた。

「まず、無理だな。今は東部戦線全体が危ういのだ。独立した戦闘団の補充など最後になるだろう」

これは戦車も同様である。この戦闘団の基幹、第1戦車連隊第3大隊も悲惨な状況だった。

ソ連との開戦時は38輦あつた50mm長身砲搭載の3号戦車は、今や15輦となった。

同じく15輦いた75mm短身砲搭載の4号戦車が5輦、そして21輦いた20mm機関砲搭載の2号戦車に至っては僅か3輦しか残っていない。

ただし、失われた戦車でソ連軍に撃破されたものは半分もない。

残りのほとんどがこのロシアの寒さと悪路、悪天候などの故障で失われた。

我が戦車大隊は、74輦から23輦に戦車は減ったが、それでも他部隊よりはましな状態なのだ。

「仕方ありませんね少佐」

カイデル大尉も現状をよく知っている。それでも確認したのは危機感からなのだろう。

「それから異動命令が来た」

「！……、異動ですか、折角地形を覚えたのに残念ですね少佐。

ただ私は少しでもベルリンに近づくなら大歓迎ですよ」

副隊長のフォン・ランゲルト大尉の冗談には、多分に願望が入っていた。

「確かに、ベルリンには少しだけ近づく。

我々の新たな配属先は何と言っても西にいる第290歩兵師団だからな。

出発は明朝11時だ」

「了解しました。ですがそうなると4号を1輦置いていかなければなりません」

「何かあったのか」

「トランスミッションが破損しました。すぐに修復するのは難しいでしょう」

よくある故障原因といえる。

「ベイル大佐に預けるしかないな。ここには馬車以外にトラックもある。」

いざとなれば戦車を牽引してでも活用するだろう」

ベイル大佐に取って、4号戦車の75mm短身砲は大きな戦力になるはずだ。

しかし、我々に取っては貴重な戦車の数が22輦に減ったことになる。

「そうすると整備兵を残して、修理させる訳にはいきませんね」

「そうだな、1輦の為に残す訳にはいかない。」

それから、輸送段列と自動車化整備中隊は、護衛を付けて第290歩兵師団の第2防衛線の背後に回そうと思うが」

自動車化整備隊と僅かな距離でも離れるのはリスクもあるが、この戦況ではやむを得ないと判断したのだが…。

「そうすると、本部に編入した牽引車1輦と数人の整備士に負担が増えてしまうのではないでしょうか？」

「そうなるな。だがフォン・ランゲルト大尉、北方群集団も第16軍も第10軍団も、全てが敵の主攻がスタラヤ・ルツサから我々突出部の連絡路遮断に移ったと判断しているのだ」

「……、敵がなだれ込んでくるかもしれないですね」

察しの良い部下は戦場の宝だ。

「そうだ。よって後方部隊は遅らせて動かすことで安全を確保したい。」

「了解しました」

3人共、すぐに納得してくれる。

「それと、ベイル大佐に食事に誘われた。付き合いたまえ」

「ありがたいですね。そう言えば、先ほど後方部隊から連絡があり、第46歩兵連隊の精肉隊から大量の馬肉の差し入れがあったそうです」

だが、戦闘以外のことに疎い者もいる。今日の晩飯は馬肉の可能性大とかな。

「そうかありがたいな、後で礼を言っておこう」

ナポレオン戦争でもそうだったが、極寒の地では馬よりも人の方が、知恵を使って何倍も図太く生き残るようだ。

それを考えれば、もっと速く、もっと多くの冬季戦の装備があれば、傷病者も戦死者も大分減っただろう。

これは間違いなく指導部の完全な失態だ。

「お待たせしましたフォン・シュトラウス少佐」

装甲歩兵車に入ってきたのは、装甲偵察小隊長のフォン・フォツシュ中尉だ。

「ご苦労、中尉。早速だが装甲偵察小隊の状況を確認したい」

「小隊の8輪装甲車は3輦全てが良好です」

フォッシュ中尉が胸を張った。

「そうか、我々は第290歩兵師団に合流することになった。詳細はブルク参謀がするが、装甲偵察分隊は先陣を切ってもらおう」

「了解しました。お任せください」

装甲偵察小隊は、常に行軍では先頭に立つ部隊である。

その為、北方軍集団に配置された当初2個小隊6輦（定数8）いた重装甲車は半減している。

「それから、3号戦車2輦からなる戦車小隊を火力支援に付けよう」

これがロシアの戦訓だ。偵察隊には極力火力を増強すべし

「有難うございます少佐」

私は頷き、隣に座る大隊参謀に声を掛けた。

「ブルク大尉、後は頼む」

フォン・フォッシュ小隊長に対するブリーフィングを命じた私は、歩いて自動車化整備工場中隊へ向かった。

それは第30歩兵師団から第46歩兵連隊に派遣された、小さな車両整備班のすぐ近くに置かれている。

我々の整備中隊を纏めるのは50代のバックナー大尉だ。

整備兵からの叩き上げで、ドイツ軍人というより、まさに親方だ。デリケートな精密兵器である戦車が、他部隊より多く生き残っているのは、彼の力が大きいと言える。

このことからバックナー大尉は、戦闘団で一種独特の権威を持っているのだ。

「フォン・シュトラウス少佐……、故障した4号戦車をここに置いていくそうですね」

似合わない敬礼の後、かなり不満そうにバックナー大尉が尋ねてきた。

「残念ながらそう決めた。

そこで整備中隊から人は無理でも、修理マニュアルが何かを、その小さな整備班に残せないかと相談に来たのだ」

「……、分かりました。何とかしましょう」

少しだけ考えを纏めるそぶりを見せた大尉だったが、すぐに了承する。

彼は、自分の専門分野で間違った見通しを立てたことが一度もな

い。

「頼みます。バックナー大尉」

その後、二人で整備中隊を見て回り、一度大隊本部に戻った私は、その足で3人の部下を連れて、歩兵連隊本部へと向かう。

やはり故障したとはいえ、4号戦車が1輜残ることを知るとベイル大佐は嬉しさを隠しきれない様子だ。

食卓も楽しく、食事は馬肉中心だったが非常においしかったとだけ付け加えよう。

## 第4話、プロローグ

まどろみの中、かすかに鈍い砲声が聞こえてくる。

……うるさい。そう思うのが、普通だろう。

果てしなく眠いが、気になった私は目覚めてしまった。

だが瞬時に遠方の音と確認し、2度寝しようと寝袋に潜り直した。

「フォン・シュトラウス少佐、起きて下さい。ベイル大佐が呼びです」

その部下の呼び声で、万が一の事態を想像した私は飛び起きた。

「何事だ。ハウト曹長」

「ベイル大佐が歩兵連隊だけでなく、我々の戦闘団にも警戒体制を命じました」

砲声が聞こえる以上、何かのあったのだろうか、命に関わる緊急事態ではないようだ。

「分かった曹長。フォン・ランゲルト大尉を起こして、急ぎ全部隊の移動準備をさせるように伝える」

急いで、私はヨレヨレの軍服を正しながら時刻を確認する。

まだ午前6時であった。外は当然暗闇であり、寒さを我慢して歩

兵連隊本部に向かった。

寒いことには変わりないが、天候はここ最近で一番穏やかで風も弱い。

戦車大隊本部にある気温計も、氷点下12 を示しているに過ぎない。

「遅くなりましたベイル大佐」

「おお、待っていたフォン・シュトラウス少佐」

ベイル大佐は返事をしながら熱いコーヒーを差し出してくれる。

「ありがとうございます大佐」

「砲声で気付いたかもしれないが、第10軍団担当地域全域で、ボリシェヴィキの大規模な準備砲撃が始まっている」

「そのようですね。大佐」

「我が師団も砲撃を受けているが、あくまでも敵の砲撃は第18自動車化歩兵と第290歩兵師団へ集中しているとのことだ。

そこでシュトラウス戦闘団は夜明けを待たず、準備ができ次第、移動を開始してもらいたい」

友軍の危機もそうだが、急がねばならない理由は幾らでもある。

特に気象予報が外れ、ドイツ軍に都合の悪い今日に天候が回復したことは痛い。

少し前に気休めで天候の回復を祈り、それと矛盾するようだが、この効果はもう少し後のはずだった。

天候が回復したまま朝日が登れば、我らが冬眠中のルフトヴァッフェに比べ、元気な敵空軍機が活動する可能性も高い。

「了解しました。この気温なら何時もより速く準備が整うでしょう」

「頼む。それからフォン・ティッペルスキルヒ師団長は17名かなる歩兵小隊をシュトラウス戦闘団の支援につけることにした」

「助かります。大佐」

欠員だらけの装甲歩兵中隊を率いるカイデル大尉はさぞかし喜ぶだろう。

その後、すぐに戦車大隊本部に戻った私は、戦闘団全体の出撃準備を急がせる。

「フォン・シュトラウス少佐、戦闘団全体の移動準備の完了は7時40分を予定します」

大隊本部付き参謀として、各部門を見て回ってきたブルク大尉が報告に来た。

「ご苦労、大尉。夜明け前になるが、戦闘団は8時に出発することにした。

それと、カイデル大尉に歩兵が17名加わるから、急いで受けい

れろと伝えてくれ」

「了解です。しかし今からとなりますと、連携に支障があるのではないでしょうか？」

大尉が心配そうに問題点を指摘する。

「カイデル大尉に任せれば、問題ない」

「そうですね。分かりました」

遠方での砲撃音も気になるが、今は冬季の移動準備で、一番厄介な戦車のエンジンの始動状況を確認したい。

向かった戦車の待機場では、整備隊の親方バックナー大尉が支援にきてくれている。

戦闘団という小規模な戦闘単位だからこそその恩恵だろう。

「その奴、何時もより今日は暖けえーんだ。頭を使え」

親方しか知らないようなちよつとした裏技を伝授され、怒鳴られる奴には悪いが、ここは親方に任せよう。

そう判断した私はすぐ近くにいる装甲歩兵中隊に方向転換をした。

案の定、装甲歩兵中隊ではカイデル大尉は忙しそうにしている。

「カイデル大尉、状況は把握しているようだな」

「勿論ですフォン・シュトラウス少佐。

ですが今までの補充要請を散々無視して、よりにもよって出発直前に17名も補充をよこすとは………どういうことでしょうか」

カイデル大尉は真っ赤に霜焼けした眉間に、皺を寄せている。

「確かに急だったな。

このプレゼントをくれた第10軍団司令部が、今後の我々の任務を困難な物と判断していると推察できる」

「まあ我々も文句の言える立場ではないでしたね。

黙って彼らとの連携を確認します」

そう言ってカイデル大尉は、ニヤリと笑った。

そもそも、彼の装甲歩兵中隊にある3個歩兵小隊で、路外踏破能力の高い装甲歩兵小隊は1個しかない。

残りの2個軽装甲歩兵小隊は、事実上自動車化歩兵小隊なのだ。

補充兵を軽装甲歩兵にするのは、簡単なだろう。

装甲歩兵中隊には自動車化された重火器小隊1個と中隊本部もあるが、これも損耗している。

懸案の装甲歩兵中隊も問題ないとわかれば、後は新たな作戦命令に従っただけだ。

午前8時、まだ夜は明けてない。暗闇の中、別れの挨拶もそこそ

ここに、我々は縦隊を組み前進を開始した。

ただ、速度は非常にゆっくりとしている。

暖かくなったと言っても、比較的と言うだけで、平野や道路上の雪は氷結しているからだ。

それに、今の所、ソ連空軍が夜間攻撃をする可能性は低い。

ライトをつけても危険性が小さく、ゆっくり進めば事故のリスクを最小限にできる。

しばらく、進むと第30歩兵師団と第290歩兵師団の境界に近づいてくる。

境界と言っても何かあるわけではない。

近くには、第46歩兵連隊の第2防衛線を形成する中隊がいるらしいが、暗闇で全く分からない。

突然、無線機が機械音を発し始め、ハウト曹長が対応を始めた。

「大佐、どうやらこの周波数で、第290歩兵師団の隊内通信が行われています。お聞き下さい」

『確認出来るだけで敵は第1線の我が連隊を2ヶ所で突破した。第2線は警戒してくれ』

『その件は了解している。』

西側の穴には第18自動車化歩兵師団からの援軍を投入した。

彼らと共に敵の突破口を塞ぐのだ』

続いて、我々が第290の師団長に無線で呼ばれた。

『戦闘団に連絡士官を回した。彼の助言に留意せよ』

どうやら、近くに第290歩兵師団の部隊がいて、我々の到着を知らせたようだ。

すぐに装甲偵察隊に無線で知らせる。

「中尉、連絡士官がこちらに向かっている。気をつけるよ」

「分かりました」

これで、装甲偵察小隊が人身事故を起こすこともないだろう。

その後、午前10時を過ぎ、日の出前の空が大分明るくなってきた。

「少佐、使者と合流しました」

「ご苦労、中尉」

二人の下士官を連れ、連絡士官は、痩せた馬に乗ってやってきた。

「第290歩兵師団司令部付き参謀ラッティン大尉でありますシユトラウス少佐」

私はブルク参謀率いる大隊本部の装甲歩兵車に移乗した。

さらに次席指揮官のフォン・ランゲルト大尉も呼んで、ブリーフ  
イングを開く。

「最新の戦況を聞きたい」

「はい。まずソ連軍ですが、総兵力は相変わらず不明です。

東西共に軍団規模の兵力と推計し、最低でも10万人以上いるの  
ではないかと判断しています」

「要は大軍としか分かっていないのだな」

「申し訳ありません。フォン・シュトラウス少佐が仰いる通りで  
す。

我々が分かっているのは、西側の第一線である第502歩兵連隊  
の防衛線を、2ヶ所で突破されたことだけです。

この内、1ヶ所は第18自動車化歩兵師団からの援軍が突破口を  
攻撃中で、もう1ヶ所に関しては完全に突破されました」

既に、どうしようもなくヤバい状況のようだ。

「そして、シュトラウス戦闘団には、まず東側、第一線を担当す  
る第501歩兵連隊に支援部隊を分遣して頂きます」

そしてラッティン大尉は申し訳なさそうに続けた。

「その上でシュトラウス戦闘団には第502歩兵連隊と合流して、

突破口を塞いで貰いたいとのことですよ」

最初の任務は問題ないだろう。

だが数万の兵力を擁する敵が、1度突破に成功した場所を簡単に明け渡すはずもない。

しかし、それは言っても詮無きこと、私はすぐに次席指揮官のフォン・ランゲルト大尉に話しかけた。

「フォン・ランゲルト大尉、残念だが兵力を2分するしかないな。

私が第502歩兵連隊に合流する。よって君には第501歩兵連隊の支援を頼む」

「了解です。少佐」

「それから大隊本部、補給段列後、整備中隊だが、第501連隊に大半を残すことにする」

これに一瞬、反論しようとしたフォン・ランゲルト大尉だったが、この戦況で後方部門を動かす危険を思い出したようで、素直に頷いた。

## 第5話、プロローグ

我が戦闘団は、第501歩兵連隊主力との合流に成功した。

ここで、22輦しかない戦車の内、3号戦車5輦と4号戦車1輦、2号戦車1輦の計7輦、さらに軽装甲歩兵を乗せたトラック3台を分遣する。

「フォン・ランゲルト大尉、後は頼む」

「お任せ下さいフォン・シュトラウス少佐」

独ソ戦開始以来の戦友同士である私達は、互いに頷きあっただけで、別れを済ませる。

いずれにせよ、西進する戦闘団の兵力は微々たるものだ。

主力の戦車大隊は戦車15輦と指揮戦車1輦、車両整備回収隊の2台の牽引車である。

カイデル大尉率いる装甲歩兵中隊は、装甲兵員輸送車が5輦とトラック5台を有するだけ。

そして、フォン・フォッシュ中尉率いる装甲歩兵小隊の重装甲車3輦もいる。

これに僅かな数の乗用車やバイク、あるいは補給品を積んだトラックが加わる。

簡単に言えば、戦車大隊と装甲歩兵中隊を基幹とするこの戦闘団は、今や戦車3個小隊と2個装甲歩兵小隊、1個装甲偵察分隊の戦力しかないのだ。

私はその小さな部隊を率い、朝日で輝く雪景色の中、再び西進を開始したのだった。

~~~~~

所で、我がドイツ国防軍には、88mm高射砲Flak 18と言う兵器が存在する……勿論、高射砲という名の通り、中高度までに対応する対空砲である。

だが、その高い初速に目を付けたドイツ軍は、以前より専用徹甲弾を開発して配備していた。

そのおかげで、88mm高射砲は汎用性を増し、対戦車戦闘能力のある対空砲、或いは対地対空両用砲とも言うべき兵器となったのだ。

現在、第3帝国で、ソ連軍の重戦車を遠距離から叩ける対戦車砲は、僅かな重砲を除けば、この88mm高射砲しかない。

ただ牽引式の火砲である以上、この兵器に戦車のような装甲はなく、榴弾でも簡単にやられる欠点もある。

さらに、非装甲でありながら6トンを超える砲重量の為、牽引に8トンハーフトラックを使っても機動力は低い。

これら特徴を勘案すると、攻撃では使い方が限定される一方で、

防御においては計り知れない威力を発揮する兵器と言えよう。

特に長射程を生かして行うアウトレンジからの砲撃は、砲撃位置変更の困難さを補ってあまりある。

この88mm高射砲を主軸にすえた陣地に、37mm対戦車砲や歩兵を支援に加えれば、堅陣に早変わりする。

更にこれを戦車が支援すれば、雪と凍結で機動力の低下した敵にかなりの出血を強いることが出来るだろう。

幸運なことに、その88mm高射砲の1門が、我々の目的地である第502歩兵連隊第3歩兵大隊にも配備されているのだ。

ただ、その合流予定地点に近づくにつれ、砲声だけでなく銃声までも次第に聴こえてくるのが、非常に気がかりである。

このせいで、戦闘団の将兵の緊張も否が応でも増していく。

『第3歩兵大隊との接触に成功。
同隊は現在敵と交戦中』

先行するフォン・フォツシュの装甲偵察隊から、きな臭い報告が入る。

本隊に出来ることは、可能な限り急いで現地に向かうしかない。
到着まで後僅かな距離で、再びフォツシュ中尉から無線連絡が入る。

『敵は数門の軽野砲に支援された連隊規模の歩兵です。今のところ敵戦車は確認出来ていません』

やや安堵の声を混ぜたフォッシュ中尉の冷静な報告に、私は一言、了解とだけ告げ、彼の指揮を邪魔しないようにする。

「全員聞いてくれ、直ぐ先で友軍が戦闘中だ。」

4号戦車は直ちに全進して榴弾を使い、装甲偵察小隊と共に歩兵大隊の支援をせよ。

残りは一時後方で待機、私の命令を待て」

この命令により、直ぐに4号戦車は先行する。

それに我が指揮戦車も続き、第3歩兵大隊に向かった。

到着した戦場ではいつものようにソ連兵が、正面から雄叫びを上げて死兵の如く突撃している。

その一方でそれを迫撃砲や機関銃で迎撃する友軍の歩兵達も、何故か混乱状態にあるようだ。

私の目に映る雪原に伏せて戦う歩兵達の動きは、明らかに部隊間の統制を欠き、それぞれの小隊や中隊ごとだけで、迫りくるソ連兵達をただ撃退しているだけに見える。

そんな中、先着した装甲偵察小隊の重装甲車3輜と3号戦車2輜は、敵の主要攻勢地点で十分に牽制の役割を果たしていた。

それらを確認した私は、4号戦車3輜の配置を決め、まずは邪魔な敵の歩兵砲を狙わせた。

そして、3輦の4号戦車の75mm短身砲から打ち出される榴弾は、直ぐに2門の歩兵砲を沈黙させる。

後は、装甲偵察隊の戦闘車輛が敵歩兵を重機関銃や戦車砲でソ連軍の攻撃を撃退しながら、4号の榴弾で敵歩兵をなぎ倒せば良い。

混乱していた友軍歩兵達も一息つき、体制を立て直し始めた。

更に4号戦車の出現でソ連兵の戦意も弱まり始めたようだ。

こうなれば、普通の軍隊なら、部隊の再編に入るだろう。

だがソビエト共産党の党軍には油断出来ない。

奴らの場合は、消耗品である突撃する兵の補充をしているだけの可能性も高いのだ。

敵の攻撃が鈍るのを見届けた後、操縦士が巧みに3号指揮戦車を動かし、第502歩兵連隊第3歩兵大隊本部らしきテントに横づける。

その影から、慌て出て来たのはかなり年のいった大尉だ。

先の大戦時にドイツ帝国軍の士官だったのか、帝政期にばらまかれた古い勲章を付けている。

おそらく彼は、フランス戦後の戦力増強の際、数多く作られた師団の士官不足を賄う為に誕生した、短期養成再任官組なのだろう。

「現在第3大隊の指揮を取っているベルツ大尉です」

その年配の士官が挨拶してくる。

「大尉、急いで戦況を説明してくれ」

敬礼もそこそこ私は要求する。

「少し前に敵は我々の防衛線を粉碎しました。

その際、大隊長は戦死。以後、先任の私が指揮をとっています」

年配の緊張気味の大尉を気づかう暇はない。

正直、会ったこともない前大隊長などどうでもいい。

生きてる奴らを心配する私は思わず声を荒げて尋ねた。

「この88mm高射砲や他の中隊はどうしたと訊いているのだ大尉。やられたのか」

「いえ、敵の攻撃は陣地を避ける形で始まり、中隊間にできた間隙を突破されただけです。

陣地はまだ健在だと思います」

ちっ。こいつは駄目だな。

直ぐ近くで孤立した部隊を把握しようとしてもしていないとはな。

私は声を震わして答える大尉に見切りを付ける。

「大尉、連隊本部と連絡は付いているのか」

「いえ、その、大隊は広域の無線機を失いました」

「……そうか。後方に私の部隊がいる。
そこで無線機を使って連隊本部に状況を説明したまえ」

頼りにならない大隊長代理を後方に追い出した私は、彼の後ろに立っていた中尉に声を掛ける。

「中尉、ここで最も優秀な指揮官を直ぐに連れてこい」

私の怒鳴り声に、一瞬びっくりした表情を浮かべた中尉は、力強く頷き駆け出す。

この間に戦場からは僅かな銃撃音のみ聞こえてくるだけになった。

そのソ連軍はやや後方の林や雪原に引き下り、待機しているようだ。

その動きからは増援を待っていると判断するしかない。

私は3号指揮戦車に戻ろうと振り返る。

そこに第290歩兵師団の連絡将校であるラッティン大尉が立ち尽くしていた。

そのまま我々は、一瞬互いの目を見つ合う。

大尉は、先程のやり取りを見ていたのか、バツの悪そうな表情を浮かべたまま報告する。

「師団本部から幾つか情報が入りました。

敵は第502歩兵連隊の残る第2大隊を引き裂き、そのまま雪崩を打って前進しているそうです。

その一方で、突破した回廊の東側にいる我々の掃討にも、かなりの兵力を差し向けています」

「分かっている。だがこうも歩兵の動きが鈍ければ、ソ連軍の攻撃に対抗できない。

ここの連隊長はどうしているのだ」

「残念ながら第502歩兵連隊本部と連絡が途絶しているのとことです。

そこで師団長は、代わりに少佐から戦況を聞きたいそうです」

「師団長が？ 分かった。状況を把握次第連絡する」

連隊本部と連絡が出来ないとは、あの大隊長代理の大尉も運のないことだ。

ラッティン大尉を3号指揮戦車に戻した私は、大隊本部で先程送り出した中尉を待つことにする。

彼は一人の士官を連れて急いでやって来た。

「第3中隊長フロント大尉です。それでご用件は何でしょうか」

「孤立した88mm高射砲を中心とする陣地がどうなったのか知りたい」

ややぶつきらばうなフロント大尉に私は何故か好感を持てた。

「無線交信は不可能ですが、先程、その付近で砲声を確認しました。」

あの陣地には我が大隊の重装備が展開しており、早々に破られることなどないと思います」

「分かった。私はフォン・ウレーデ師団長と話をしてくる。その間、歩兵大隊の指揮を任せたい」

「了解です少佐」

直ぐに納得したフロント大尉にとっても、あの大隊長代理の存在は、役立たずなのだろう。

3号指揮戦車に戻ると、ラッティン大尉が待っていた。

「大まかな戦況は師団長に報告しました。残念ながら第503連隊の第2線は崩壊したようです」

私は頷き、師団本部と無線の交信を始めた。

間もなく第290歩兵師団司令官フォン・ウレーデの声がヘッドホンに響く。

『少佐良くやった。それで大隊を立て直せそうか』

「可能です。ただ指揮官を替えて頂きたい」

こういう問題は率直に言うしかない。

『いいだろう。少佐に意中の人物はいるのかね』

フォン・ウレーデ司令官が即答したことに少し驚いた。

ラッティン大尉に一瞬目を向けると、彼は肩を竦めたただけだ。

「この大隊の第3中隊長フロント大尉を推薦します」

『……良からう少佐の判断を信じよう。』

それから、第503連隊は南西に後退しながら臨時の防衛線を築く一方、突破された戦線に関しては縮小することにした。

戦線を放棄し、全周防御に適した各地点に兵を集結させる。

そして突破したソ連軍の補給を邪魔し、奴らの衰弱を待つことにする。

デミヤンスクの突出部は間もなく連軍に包囲されると第16軍司令部は判断した。

そこで、デミヤンスク近郊の部隊は包囲防衛体制に移行している。

少佐の戦闘団と第3歩兵大隊も速やかに東側の第501歩兵連隊が強化している陣地へ撤退させたい』

戦線の危機を救うことは何よりも重要だ。

しかし、孤立した友軍の為に、1度くらい我々が救出を試みる時間もあるはずだ。

「残念ですが直ぐ撤退することは不可能です、フォン・ウレーデ中将。

現在88mm高射砲を有する中隊規模の部隊が、脆弱な拠点でソ連の包囲下に陥っています。

今なら目の前のソ連軍を排除して、友軍を救助できる可能性があります
ります」

『……いいだろう。』

その攻撃の支援に師団砲兵の援護射撃を回そう。
だが急げ、砲兵隊の撤退時間も迫っている』

「了解です」

『それから、いや後は任せるフォン・シュトラウス少佐』

「はい」

師団長との交信を終わらせた私は、ラッティン大尉に砲兵隊との打ち合わせを任せた。

それから後方にいる戦闘団主力を呼び寄せる。

さらに、第3歩兵大隊の臨時指揮官となったフロント大尉に、装甲歩兵中隊長カイル大尉と参謀のブルク大尉を加えて、入念な打ち合わせをしたのだ。

決まった攻撃計画は単純だ。まず師団砲兵と戦車砲、迫撃砲による制圧砲撃を行う。

それから戦車と歩兵大隊と下車した装甲歩兵で敵を排除するのだ。

口で言うのは簡単だが正直難しい任務だ。

こちらの歩兵は全部で400程度しかいないのに対して、敵の兵力は恐らく正面だけで1400を超えるだろう。

だが、軽火器中心のソ連兵にとって、この短時間で塹壕を用意できないことは致命的な弱点になる。

だからこそ私は1700メートル先にある友軍の陣地まで、十分に到達可能と判断し、皆に命を賭けさせるのだ。

やがて、各部隊から配置の完了を知らせる報告が次々と入ってきた。

第6話、プロローグ

雪原に横たわる両軍の兵士達の遺体、破損した火器、車両、倒れた軍馬、砲弾によってえぐられ砲痕、飛び散った土砂、そして赤黒い血。

見慣れた光景を挟み、ソ連軍と新たな攻撃を企図する我々は、束の間の小競り合いを繰り返している。

だが、それももう終わる時間だ。

辺りに鳴り響いた轟音とともに、正面にいるソ連軍の陣地が、次々と榴弾の爆風に包まれていく。

第290歩兵師団の砲兵連隊から放たれた榴弾は、塹壕にいないソ連兵の多くをなぎ倒すだろう。

105mm野砲と150mm重野戦砲の着弾を確認したラッティン大尉は、より効果的な打撃を与えようと、着弾地点の修正を要求する。

それに加えて、歩兵隊の主力兵器の一つ、81ミリ重迫撃砲を始めとする迫撃砲が、次々とソ連兵達に放たれた。

この濃密な砲撃で、ソ連軍が恐慌状態に陥ってくれば、なおのこと有り難いのだが。

最近のソ連兵はやたらしぶとい。

それを証明するかのように、一部の迫撃砲が果敢に反撃してきた。

敵の指揮官もこの砲火の中で、我々の攻勢間近と感じ、懸命に部隊を統制しようとしているだろう。

「ラッティン大尉、砲兵連隊に進撃路への縦射に切りかえるよう要請せよ」

すぐに、師団の野砲の砲火は弱まり、、少しずつ西へと着弾を移動させていく。

「前進せよ」

その瞬間、私は前部隊に攻撃命令を出した。

まず中央と左翼の雪原に、三号戦車の小隊と装甲偵察小隊が向かっていく。

また、右翼の森林にも牽制の為に4号戦車を1輦投入した。

戦車隊を前に歩兵を後ろに従えたオーソドックスな攻撃は、路面の凍結もあってゆっくりとしたものになる。

だが、ソ連軍の反撃自体微弱であり、最初の攻撃は予想以上に上手く行っている。

敵の反撃らしい反撃は、我々の戦車を間近で見、恐怖を覚えたソ連兵達によって行われている過ぎない。

これに3号戦車は容赦なく機関銃で掃討している。
個々のソ連兵は確かに発砲することで、恐怖を紛らわせたかもしれない。

だが、結果からみれば、ただ弾薬と命を無駄にして、勝手に消耗している。

敵の防衛線を易々と突破した部隊に、私はさらなる前進を命令した。

そして乗車する3号指揮戦車にも、続くように命令した。

あの砲撃を耐えた正面のソ連兵の生き残りは、既に防衛線を放棄し潰走しつつある。

我が戦車隊はこのまま敵の防衛線を越えて、ほふくもせずに背中を向ける敵を機関銃で掃討しつつ、さらなる前進を続けた。

一方、歩兵大隊から、機関銃を主軸とした歩兵小隊が幾つか側面に展開していく。

『88の陣地の外縁にソ連軍の包囲部隊を確認。大隊規模の歩兵で戦車は見受けられません。』

ただし45ミリ対戦車砲1門を確認』

正面を突破して、先行した装甲偵察小隊から、新たな情報が入ってきた。

ソ連軍の包囲部隊か。

「ラッティン大尉、師団砲兵はまだ砲撃可能か」

「残念ですが、既に陣地を引き払っています。」

再展開に時間がかかりますが、師団長に要請して、新たな支援砲撃を受けますか？」

「いや、時間が惜しい。

歩兵で対戦車砲を潰したいところだが、やはり迫撃砲と戦車砲で攻撃するしかないな」

最初の師団砲兵による準備砲撃は、この敵も少しだけ捉えたが、効果は低かったようだ。

再び4号の75ミリ短身砲の榴弾と81ミリ重迫撃砲が、支援砲撃を開始した。

効果は不明だが、どうしても時間的余裕がない。

すぐに私は3号戦車を主体とした攻撃を命令した。

確認された敵の45ミリ対戦車砲は、一切の反撃をせずに沈黙している。

今の戦車の速度では、防御側に普段以上のアドバンテージを与える。

そのせいか、突如として、前進する三号戦車の砲塔が吹っ飛んだ。

『第2小隊の正面右翼に別の45ミリ対戦車砲を確認』

戦車中隊の指揮官から、怒鳴り声が入る。

すぐに4号戦車による支援を始めさせたが、その前に仲間の復讐に燃える3号戦車の集中砲撃を浴びせた。

敵対戦車砲は沈黙する。

続いて、もう1門についても報告が来た。

『大隊長、最初に発見した45ミリ対戦車砲は破壊に成功しました』

「良くやった。引き続き戦車隊は敵を掃討せよ」

了解の返事は明るい。

友軍との接触は間近だからか。

側面への兵力展開も上手く行っている。何か抜かりはないはないだろうか。

戦車の支援をつける装甲偵察隊が、遂に包囲下の友軍に接触した。

私は指揮戦車をさらに前進させ、包囲下にあった部隊の状況を確認しに向かう。

友軍の陣地まで少し時間がかかる。

何れにせよ3号指揮戦車についている主砲は張りぼてであり、前に出すぎる訳にはいかなかった。

もどかしい時間は過ぎ、ソ連軍の包囲下にあった指揮官とようやく話をできる。

「ヴァンク大尉であります。感謝します少佐」

汚れた軍服を着た指揮官の感謝に私は簡単に頷き尋ねた。

「すぐに撤退したしたい」

「我々の撤退準備は出来ています」

「よろしい。殿は戦車隊だ。

君等はまず攻撃開始線まで引き、装甲部隊の撤退を支援せよ」

「了解です」

すぐに撤退は始まり、順次部隊が後退する。

幸いにしてソ連軍も、更なる我々の攻撃を警戒しているようで、防御を固めている。

その隙に我々ドイツ軍の撤退は損害なく成功した。

孤立部隊の救出に成功した我々は、第290歩兵師団第502連隊の第3大隊と共に新たな戦線を築いた。

そこへ、第290の師団長であるフォン・ウレーデ中將から通信が入った。

『シュトラウス少佐。ご苦労だった。

先程、ヒトラー総統直々の通信が入った。

その際、私は貴官の成果を報告した。

我が総統は非常に感銘を受けておられた』

「ありがとうございます閣下」

ありがた迷惑な。

ドイツ軍ではバルバロッサ作戦の失敗後も、不思議と総統に対する下士官兵の信頼は揺るぎない。

だが将校の中核である我々ユンカーの大半は、ヒトラー総統の戦略を疑っているのだ。

正直なところ、嬉しくない。

『また我が総統は如何なる理由が有ろうとも現戦線を保持するよう求められた。』

この死守命令により、我が師団とシュトラウス戦闘団は、この敵味方入り乱れた連絡線を守らねばならない』

「……了解しました」

約1個連隊半で、細長い回廊を守らなければいけないようだ。しかも、場所によっては全周からの猛攻撃にさらされるのだ。

『現在の戦況は逼迫している。』

信じたくないことだが、ソ連軍の空挺部隊が現れ、奴らの突破口前方に降下している。

第503歩兵連隊の一部に関しては、キュヒラー上級大將が我が総統を説得し、転戦を認めさせた。

だが突破された戦線そのものは第39軍団、それもフランスから到着したばかりの第8歩兵師団に丸投げするしかない』

「援軍が向かっていると知り、安心しました」

『そうかね。それでもデミヤンスクに取り残される我々には、難問があるのだ少佐。』

第10軍団長ハンセン砲兵大將は、第2軍団長アーレフェルト歩兵大將の要請に応じて、突破された回廊を整理次第、南部に増援を送ることにしていたが、兵が全く足りない』

これは我々の南を守る、脆弱な武装親衛隊第3自動車化師団トーテンコップフを補強する為の兵力だ。

ハンセン軍団長は、これをシュトラウス集団に所属する戦車の一部と、第30歩兵師団の2個歩兵大隊で行う予定だったのだ。

「難問と言うのは、總統の死守命令ですか」

『そうだ。だが、どうしても戦車10輜を南部に派遣したい』

「私は師団長の要請に従います。」

明日から再び天候が悪化する予報です。急ぐべきです閣下」

『では、戦車を投入してくれ。ただし貴官はそこに残れ』

「しかし」

『我々は、最高指導者に連絡線の残りを死守するよう命令されたのだ。』

我々がここから移動すれば、ベルリンからとんでもない命令が来てしまう』

「……了解です」

私はすぐに部隊の一部を第3武装親衛隊師団に向かわせた。

ドイツ軍は包囲下に陥る想定をして備えていたが、現実になんかそうなりそうなら、私は不安で押しつぶされそうだった。
空中補給が失敗したら。

いや、私が不安になれば兵も動揺する。

冬季戦の準備を怠ったベルリンの指導者達が、再び失策をしないと信じるしかないのだ。

第7話、新たな人生

1942年、1月27日、ドイツ第3帝国東プロイセン州の都市
ラステンブルク郊外、総統大本営……。

「どうなっているんだ！」

場違いな俺の大声が、目の前の上品な執務室に響き渡る。

数人居る同室者達は、何事かとすぐに俺の方へと振り向いた。

彼らの顔は強張ったまま、凍りついたように俺を見つめている。

期せずして彼らの視線を集めてしまった俺は、さらに叫びたいと
いう衝動を何とか抑えこむ。

代わりに心を落ち着かせようと、ただ執務室を行ったり来たりす
る。

叫んだせいか、或いは歩き回ったおかげか、俺は少しでも冷静さ
を取り戻した。

現在進行中の不可解な状況をきちんと理解するには、冷静さを保
ちつつ過去を振り返る必要がある。

まず、俺は間違いなく西暦2000年に誕生した日本人の一人であ
り、西暦2028年の誕生日を迎えたばかりだった。

その日本は、20世紀末から21世紀初頭にかけて、大きな苦難

に幾つも直面してきた。

バブル崩壊以来露呈した、頭の良い官僚の無能さとモラルの低さ。選挙戦術と地元への利益誘導に長け、次世代へのビジョンはおろか、逆に未来の資金を食いつぶすだけの行政能力のない国会議員達。彼らは公平な政治や行政を行わず、法の抜け道を利用して利益をあげ、日本を確かに駄目にした。

いや、莫大な国債だけではない。

彼らは崩壊寸前の社会保障や領土問題、行政改革など多くの諸問題を後世に押し付けた。

だが、例えば憲法が国民の信任を受けてないにしても、当時の日本が民主主義国家であったことに変わりはない。

この為、日本の衰退における最終責任が、当時の有権者にあったのも事実なのだ。

各時代時代の有権者の過半数が、しがらみのない政治を選べば、当然ながら政官の癒着も減る方向に歩み。

改革を望べば、少なくとも旧き政治から移り変わろうとしただろう。

だからこそ西暦2009年、その改革を担うと期待された政党が日本の政権を奪取できたのだ。

残念ながら、支持母体に労働組合を持つ新与党の改革は、口先倒れの大失敗に終わった。

だからと言ってこれで国民の改革熱が冷める筈もなく、以前よりも激しく燃え広がった。

当時の最大の問題は、その国民の思いという火に応えられない国会議員達の存在だ。

折しも西暦2006年からの日本は、短命首相を量産した挙げ句、二大政党が共に国民の信を失った時期でもある。

この十数年間にも及ぶ政治の大混乱期は、その後の西暦2028年から見れば、改革の黎明期として位置づけられている。

皮肉なことに、この指導力のない政府と国会こそが、惰眠を貪る日本国民を目覚めさせたようだ。

日本国民の圧倒的多数が、常に大胆な変革や改革を望み。

それがやがて、日本国民の改革への強い欲求を満たす政党の誕生に繋がった。

西暦2017年、その政党が衆院の8割を確保して政権を奪うと、国民の支持を背景に憲法改正を次々と行い、日本の首相公選制を導入する。

続いて、個別政策をインターネットで国民投票にかける制度も導入されるなど、矢継ぎ早の改革を開始している。

これで議院内閣制は終焉を迎え、国会の多数派と国民の多数派の考え方のズレは減少した。

法は国会で審議された後に、提出された複数の選択肢から、国民投票で制定されることになる。

また首相公選制度で選ばれた総理大臣は、国会と意見を分けた法も数日後に国民投票で制定できた。

この為、改革速度は速く。その対象はあらゆる組織に及んだ。

官僚組織、政党組織、労働組合、場合によっては宗教組織にも及ぶこの改革で、日本は良くも悪くも合理的になった。

こうした改革が進むと同時に着手されたのが、永らく日本で曖昧にされていた責任問題だ。

すぐに政治家の進退は政治家でなく、全国民が判断できるようになった。

西暦2018年の国民投票で、賛成多数によって施行された幾つかの新法は、過去の権力者達を震え上がらせる内容だった。

裁判や捜査で、副作用のない自白剤の使用を合法化。

これで、官僚や政治家等によって日本から収奪した財産の調査は進み。

同時に財政支出や社会保証支出における最終受益者の調査も可能になった。

そして、この公共財産から不当に収益を上げた行為には、過去に

遡った法律の適用と時効撤廃を定めた。

この結果、グレーゾーンの政治汚職は真っ黒になり、財産を次々と差し押さえられ。

公共事業で利益を得た国会議員が、多数判明して次々と逮捕されていった。

これには勿論、法曹会を中心とした根強い反対もあった。

だが、最終的に主権者であるこの時代の日本国民が、国債を残した過去の政治家と官僚から、負債をできる限り取り立てることを決断した。

既に、この時代の日本人の多数派は、緩慢な死を迎えるのを良しとしない。

例え混乱が生じようとも、劇薬で再生することを決断した世代でもあるのだ。

事実、真に激しい痛みを伴う改革がなされたのも、この世代だ。

責任追求に玉虫色の決着など有り得ない時代……。

というたいそうな認識は、俺の選挙区で誕生した政治家の受け売りを、拝借しまくったものだ。

兎も角、2020年、日本政府は官僚の仕事がお役所的といえることに目を付けた。

その結果、多くの仕事に素人でも出来るマニュアル化を施し、同時に大規模な給与カットを決断した。

西暦2020年代、国家公務員の給与平均は、4百万円で福利厚生も雀の涙である。

有能な奴にはできる限り民間で、日本に活力をもたらしてもらおう。

一方で公務員は、失業対策を兼ねて給与を抑える代わりに、数の力で公務をこなす。

それが新しい国家公務員の姿だ。

そうは言っても経済的に弱体化した今の日本では、未だに人気のある有望な就職先でもある。

この俺も、その公務員になれた運の良い奴の一人。

その俺を含めた公務員の合い言葉は、改革の痛みを少しでも民間とそして後世と分かち合おうだ。

しかし、今の日本とて決して一枚岩ではない。

一部の過激な既得権益者達は、改革派を追い落とそうと犯罪にも手を染め。

片や、急進改革派の中にも、罪を暴かれた政治家達を家族ごと抹殺しようと試みた。

その中には、タイムスリップをして過去の利権集団の存在を、血縁ごと抹殺しようと主張する組織もいた。

歴史の羅針盤と名乗るぶっ飛んだ組織がそれだ。

俺の就職先であり、2020年代の日本の治安を守る内務省は、多角的な見地からこの組織を穏健派と判断していた。

しかしながらこの判断は、最近になって間違いと判明する。

内務省自体がこの組織の武器密輸を突き止めたのだ。

第8話、狼の砦

そして西暦2028年7月7日……。

日本国内務省は、過激派に認定したばかりの歴史の羅針盤に、不審な動きがあることを掴んだ。

過激派の取り締まりを担当する特殊急襲部隊が、すぐに各地の拠点を派遣される。

特に、歴史の羅針盤の本部には、二百人を超える完全武装の隊員を投入する。

この中に、28歳になったばかりの俺の姿もあった。

内務省から部隊に突入命令が出されると、催涙弾が次々に撃ち込まれ、我々は突入する。

俺も当然、同僚達と共に正面玄関から侵入した。

激しい抵抗を覚悟した奇襲だったが、問題も死傷者もなく終結した。

この逮捕劇で、容疑者達が、一切の抵抗を示さなかったおかげだ。

歴史の羅針盤指導者である老人もまた、広間にある正体不明な大型機械の脇で、大人しく椅子に座っている。

俺の同僚達は、大型機器に爆発物がないか確認したり、逮捕状の中身を指導者に読み聞かせた。

内容を理解できたかと聞いた我々に、何故か指導者は静かに語り

始める。

「我々は過去に遡ることに成功した。そこで5百人近い殺人をすることで日本を救う代わりに、その後に誕生する命の連鎖を抹殺する罪を犯した。

我々はその覚悟を持って過去を変えたのだ。それなのに何故だ。何故現代に戻っても現実が変わっていない。

そうか、異なる歴史の世界が生まれたのは間違いない。

確かに我々は過去へ行ったのだから。

その恩恵を受けた日本がある世界。必ずどこかに存在するのも確かだ。

その世界こそ、同志達が生きるべき世界なのだ」

不気味な老人は妄想を語り終わると、普通に治安部隊員と会話をした。

勿論、俺を含めた治安部隊員は、こいつらを頭のいかれた連中としか思っていなかった。

彼らの代表者以外の者は不気味に黙秘を続けている。

今回、この組織の本部で逮捕されたメンバーは約40人に登った。

この内、機械のある部屋には、代表者の他に4人のメンバーが一緒に捕まっている。

この5人を17名の治安部隊員が監視する。

特殊部隊の同僚が組織の指導者に、部屋的大型機器について尋ねた瞬間だった。

これまで従順だった歴史の羅針盤の構成員達が暴れ出したのだ。

警備していた特殊部隊員の注意は、完全に引き付けられた。

その隙に彼らの代表者は、近くにあった巨大な機械を作動させる。

彼の同志達がそこに集まるろうとして、我々内務省治安維持部隊と激しい取っ組み合いを始め。

そして、よりもよって俺はその代表者に飛びかかったのだ。

「馬鹿者。そのスイッチを戻すのだ」

その五十歳位の代表者は喚いた。

確かに、その時機械の操作ボタンの幾つかに、接触したのは間違いない。

そして、直ぐに我々二人は強い光に包まれた。

気づいた時、俺は質素な部屋で、組織の代表者のすぐ横で倒れていた。

「おい、起きろ。」

年は確か60歳、その痩せた体を揺り動かすと、彼は目をパチッと開ける。

「ここはどこだ」

寝ぼけたような声を出し、俺が訊きたいことを口にする。

「爺さん。それはこっちのセリフだ」

思わず、横柄な口になるのは仕方ないだろう。

そもそもこの事態を招いた機械の持ち主が、場所を聞いて良いはずない。

「あんたは誰だ」

ふざけてるのか、この爺さん。

「お前を逮捕した内務省の者に決まっているだろう」

胸を張って伝えても、爺さんは感銘を受けず、固まったまま呆然としている。

「君、すぐに顔を後ろの鏡で見るのだ」

あまりに、古典的な犯罪者のだまし討ちの手口、俺は引つかかるほど馬鹿じゃない。

「そんなことで騙されるか」

その時、左手方向の両開きの扉が開き、5人の拳銃を持った軍服姿の男達が部屋に突入してきた。

「動くな」

そう言って、組織の代表者に銃を向けている。

流石に犯罪者と言ふべきか、既に両手を上げていた。

俺も犯罪者と間違えられないように、慌てて両手を上げる。

だが銃を持った西洋系の軍人達は、俺をチラッと見ただけで、容疑者の爺さんを取り押さえた。

そして一人が俺の方へ振り向く。

「総統、ご無事ですか」

ドイツ語だ……。

そう言えば、さっきの制止の声もドイツ語だったが、何故か俺は理解できた。

「ありがとうございます。大丈夫です」

恐らく異国の軍人さん達は、日本も加盟する民主主義同盟の特殊部隊なのだろう。

救出対象にも総統というコードネームを与えらるゝとは、実に徹底している。

彼は一瞬、怪訝そうな顔をして頷いた。

「総統の安全は確保、反逆者を連行する」

西洋系の特殊部隊員が低い声で言つと、爺さんは慌てて叫んだ。

「おい、内務省の犬、今すぐ鏡を見る」

失礼な奴だ。しかも往生際が悪い。まだ、そんなことを言うなんて。

そう思いながらも、気になって後ろの鏡を覗いた。

「どうなってるんだ」

突然の叫び声に、同室する全員が一様に緊張して俺を見た。

だが、俺は彼らの心情など、どうでも良いとばかりに部屋を行ったり来たりする。

少しだけ冷静になった俺は、再び鏡の前に立つ。

どう見ても、歴史の教科書でよくみる第3帝国の総統だ。

頭がクラクラして思考も停止する。
すると疫病神の爺さんが声を掛けてくる。

「こら、早くこいつらを止めんか。何をされるか分からんわい」

「うるさいぞ爺」

こっちは外見がヒトラーになっていて、それどころではないのだ。
いや、待てよ。

「爺さんが犯人だったな。頼むから元の体に戻してくれ」

「……、儂には分からんのじゃ」

分からんって、まさかふざけているのか？

絶句した俺に爺さんは容赦なく、追い討ちをかける。

「そもそもタイムスリップで、他人と入れ替わるはずなどないのじゃよ」

爺さんはそれだけを素っ気なく言い、肩をすくめる。

今なら分かる。

この爺さんと一党は、そんじょそこらの過激派よりも遥かに危険な奴らだったのだ。

「仕方ない、この話は後だ。元の世界に帰ってから考えよう」

「ふん、わし一人の帰り方ですら分からんのに、ヒトラーに成ったお前さんの帰り方が、分かるわけなかるう」

爺をぶっ飛ばしたい衝動に駆られる。

だが、俺の理性がこいつの言うことも一理あると訴えてくる。

俺は再び爺さんに声をかけようと息を吸い込み、ふと武装隊員達
の存在を思い出した。

彼らは、俺と爺さんの日本語の会話を啞然としたまま見守っている。

そつだ。爺さんより先に確認するかがあった。

本当に彼らが俺をヒトラーと認識しているかどうか、確認しなければならぬ。

「待て。彼は私の部下だ。放してやれ」

俺と爺さんの激しい日本語の会話を、面食らった様子で気にする外国人達に、俺は少し偉そうに言ってみる。

「はっ。しかし、いえ、分かりました總統」

すぐに、爺さんは放され、ねじ上げられた腕をさすっている。

「彼と内密の話がある。職務に戻ってくれ」

彼らはよく映画などで見かける、ローマ式の挨拶をして、部屋から出ていった。

どうやら間違いない。俺は總統みたいだ。

「さあ、どういふことか、本当のことを聞かせて貰おう。
何で爺さんだけが前と同じで、俺はアドルフに憑依したのだ」

「知らん。何度も言うが本当に分からんのだ」

「そんな嘘は俺を信じないぞ。
それともさっきの奴らに引き渡せば、全てを話たくなるのか」

一度血をみないとこの犯罪者は、素直になれないようだ。

「冗談ではないぞ。」

貴様は本当に日本の内務省職員か。

僕には助けて貰う権利があるはずじゃ。違うか」

俺の目が怪しく光ったのが分かり、爺は慌てて道理に訴える。

しばらくの間、我々は鋭く視線を交差させた。

結局、仕方なく俺の方が引き下がる。

それにしても途方に暮れるしかないとはこのことを指すのだろう。

重苦しい沈黙が部屋を支配する。

「ここは第二次世界大戦前後の時代みたいじゃな。

わしはこの世界の日本に行き、改革をしようと思う」

突然爺さんが言い出す。

ふざけるな。俺が犯罪者を逃すわけないだろう。

「それを許すと思うのか、過去を変えるなんて許さん」

俺は凄い剣幕で怒鳴りつけたが、爺さんはそれを上回る凄惨な表情で、ニヤリと笑っただけだ。

「前にも言ったが我々の歴史と、この世界は既に分岐したのだ。

今や君の存在そのものが、我々の歴史にとって最大のイレギュラ―じゃないのかね。

違っかなヒトラー総統君」

……何も言い返せない。

俺の外見がアドルフであっても、考え方は全く違うのだ。

例え歴史を変えたくなくても、アドルフの日常など知らない俺が、全く同じ行動など取れる筈がない。

「まあ、マニュアルで動く政府の犬が、見知らぬ世界で弱気になるのも分かるがの」

俺は反論しようとして開きかけた口を閉じる。

挑発に乗る必要はない。

ましてや爺の存在のおかげで、一人ぼっちにならないことを、神に感謝しているのも事実だ。

「……………、本当に、我々の未来は変わらないのか」

「ああ、間違いない。残念ながら戻れば日常が待っている」

爺さんとは考え方の方向性に大きく違いはあるが、俺はこの時間旅行のパラドックスに淒く安堵した。

「とにかく、少しでも歴史に干渉するのは避けたい」

「本気かね？」

この世界は現実が存在していても、我々の世界に取っては幻想の世界だ。

例え君が自由に生きても問題ない。

まあ、我々の歴史通りのドイツ総統として生き、大虐殺を続けて処刑されるのも楽しい人生かもしれないがな。

わしならば第3帝国の国家元首として、祖国日本を助け、ついで

にドイツ国民も救うがの」

爺さんの的外れな私見は兎も角、的を射た歴史的事実の指摘に、俺は自分で思っているほど冷静でないことに気づかされた。

治安部隊の訓練のおかげでパニックこそ起こしていないが、總統の行為や末路まで思い至らなかった。
急に寒気がしてきた。

「うっ。頭が痛い」

加えて、俺は激しい頭痛に襲われた。片膝を着き、頭を押さえる。
爺は、あたふたした様子で俺にしがみつく。

「おい、冗談だろう。しっかりしろ」
その言葉から爺さんが、心から俺を心配していると感じる。
こいつも俺に死なれたら心細いのだろう。

俺は痛みを振り払うように立ち上げり、爺さんを安心させようとした。

すると痛みは引き始め、今度は總統の記憶の奔流に襲われた。

混乱しつつも俺は爺さんに声をかけた。

「大丈夫だ。痛みは治まった」

この言葉で爺さんはほっとしたようだ。

「いや、全く驚かせよつて。
今、お前さんに死なれたら、儂が総統暗殺者になるとこだったわ
い」

爺さんの本心を聞いた俺は、自分に怒った。

『くそつ。頭が痛いのにこいつを一瞬でも心配するなんて俺はバ
カだ』

いや、そんなことより総統の記憶だ。

頭の中が自分の物でない感じた。ごちゃごちゃしていて訳が分
らん。

だが、例え記憶があつても、土台、最期まで総統と同じ道を歩む
のは不可能な話だ。

かと言つて、西暦2028年に戻る手段はない……

「爺さん、もしこの体で死んだら正しい未来へ帰れるとおもつか」

「それはわしにもわからん。じゃが自殺しても望み薄じゃろつな」

爺さんに名案を一蹴された俺は万策つきた。

第9話、虚構

とりあえず、俺はこの世界の確実な情報を、少しでも手に入れたくなった。

総統の記憶は、断片化し過ぎていて把握困難だ。

その記憶の中にはフランス侵攻らしきものもある。

だが同様に何故かニューヨークで自由の女神を見ながら挙行する戦勝パレード、あるいは東京の国会議事堂を破壊した記憶もあるのだ。

はつきり言って、どこまでが妄想で、どこからが現実か全く分からない。

ひょっとしたら現実はいランド進攻前であり、世界大戦そのものを回避出来る可能性もある。

そこで、俺はアドルフの秘書を呼んだ。

「我が総統。ご用命は何でしょうか」

すぐに若い女性秘書が入って来た。

名は記憶の断片から、ダラと分かった。

「今日の日付を彼が知りたがってな。

あなたから何年の何月何日かを教えてやって貰いたい」

「……はい？。今日は1942年1月27日になりますよ」

この質問を何かの冗談と感じたのか、彼女はやや微笑みながら答えた。

俺も釣られるように微笑み、彼女を安心させる。

「ありがとう。仕事に戻ってくれ」

俺は自身の記憶で、一生懸命に歴史を思い出そうと試みる。

だが、浅学とはいえ歴史マニアである俺も、今は何となくにしか浮かばない。

「爺さん、あんたひよつとして戦前生まれか」

「ふ、ふざけるな。わしはまだ60歳じゃ。親だつて戦時中は生まれてなかったわい」

「……、すまん」

あまりの剣幕に、俺は思わず引き下がる。

それにしても1942年、1月27日。

確かドイツ軍がモスクワで敗れた直後。

日本がアメリカへ喧嘩を売り、枢軸国を破滅に導いてから2カ月くらい後だ。

歴史を多少知っていても、このまま総統として生き残れそうにないな。

やっぱり逃げ出すか。

だが、例えば俺に取ってこの世界が幻想みたいなものでも、戦時中の元首が逃走したら困る者もたくさんいるだろう。

いや、そもそもこの顔では逃亡など不可能か。

俺は、少しだけ割り切ることにした。

この世界は夢なのだと、何をしようと自由であり、俺の知っている地球とは別の物だと。

改めて俺は、鏡に映る今の姿を見る。

少し前までピチピチの28歳だった俺は、いきなり50歳を超える体の持ち主になってしまった。

今はこの事実を直視するしかない。

「爺さんは日本へ行け」

「急にどうしたんじゃ」

訝る爺に、俺は心情を告げる。

「この世界でも高い可能性で、戦争は枢軸国の敗北で集結するだろう。」

俺のこの外見じゃ、逃げることもできない。

どうせ爺さんの老い先も短い。

この空想世界で残り少ない人生を好き生きるといい」

「……失礼な奴だ。」

まあ、気持ちはありがたく受け取るがの。

それで、君はどうするのだ」

「俺だって死ぬのは怖い。」

「この世界が俺の生きていた地球と別物という、爺さんの言葉を信じて、俺は僅かな生の可能性を追求するつもりだ」

「……そうか。頑張ってくれ。」

それにしても、内務省君が、総統として生きる決心がついたならば、ついでに儂を第3帝国の重要人物として日本に送り込んでくれるかの」

内務省……、犬よりましか。

「条件次第だな」

「条件？、何じゃ」

「爺さんは、いや山中容疑者は、あれほどの機械を作れる科学者だったな」

よく考えれば、裁判で判決が出ていない以上、ただの容疑者だった。

しかも年上。少しだけ礼儀を改善しよう。

「違う。さつきから勘違いをしているようだ、儂は機械の動き方を知っていたに過ぎんのじゃ」

「どう言うことだ。タイムマシンを造ったのは爺さんじゃないのか」

この当たり前の疑問に、爺さんは微妙な笑みを浮かべた。

「何度も言うが、わしは内務省君の言うタイムマシンを使っただけ過ぎん。」

元々あれは、次元を超えて瞬間移動する目的で開発された装置な

のじゃよ。

だが、別次元を通過することに成功した一方で、瞬間移動に必要な不可欠な別次元での実体化は、失敗してしまった。

その結果、計画そのものが頓挫したのだ。

ただ、研究機関の倉庫に機械が眠る直前、我々の同志の一人が、次元の狭間を使って過去にいけることを偶然発見した。

そこで儂等は、倉庫に運ばた機械を借りたのじゃよ。

結局、儂に理解できたことは、次元を超えて戻る際のエネルギーベクトルを操作することで、過去50年間のみの時間旅行ができる事実だけだ」

あんな悪魔のような機械を簡単に窃盗されやがって、俺は犯人よりも研究機関という被害者に怒りを覚えた。

「50年？、おかしくないか」

「ああ、そうじゃの。」

不思議なことに、限界値よりも30年以上前の時代に我々はいるのだからな。

だからこそ、元の世界に戻ることは絶望的と言ったのじゃ」

「……………」

俺は本当にこいつを信じて良いのだろうか。

答えは決まっている。今のところ、信じるしか道はない。

「仕方ない。だが山中さんはここで何か協力できないか」

「できるかもしれんが、正直何が役に立つのか儂にも分からんよ。ああ、それから呼び名は爺さんで良いぞ」

何というか比較的到人見知り俺が、引きこまれる位にフレンドリーな爺だ。

「ならば爺さん、あんたが日本に行っても役立てないのではないか」

暗に引き止めてみる。

「何、ゾルゲとか尾崎やらと言うスパイどもに引導を渡したり、外務省と海軍の暗号についてなど、いくらでもやることはある」

「そんなことか、すぐに俺が日本の大使に警告しようか」

「いや、それはならん。

儂の日本再生プランに必要な基盤は、情報を取り引き材料にして作るつもりじゃからな」

さらつと爺さんは言い放つ。

こいつは間違いない、目的の為には手段を選ばないタイプだ。

すると、爺さんは口をすぼめ、『静かに』と囁いた。

俺は、爺さんのやり方を非難する言葉を飲み込み黙った。

すると、ドアがノックされた。

爺さんはまさか忍者なのか。

その俺の疑問を余所に、扉をノックする音が再びする。

「入れ」

「失礼します我が総統。

面会予定の海軍総司令官レーダー元帥が大本営に到着しました。

こちらへお通しても宜しいでしょうか」

入ってきた男はまず爺さんを観察してから、無慈悲な内容を俺に告げる。

俺は……、どうしたらよいのだろう。

今日は会談をキャンセルしたい。いつそのこと総統命令で帰って貰うか。

そこで、爺さんに救いを求めて見つめたが、あっさり無視された。

「分かった」

つい、爺さんの性根が『分かった』と口にしてしまった。

「では、お連れいたします」

彼は去った。そして俺は固まっていた。

「爺さん。どうしたらよい。海軍の司令官と会う予定の記憶が見つかからない」

「記憶？。記憶があるのか」

「記憶というか、その断片だ。今回は何の役にも立ちそうにない」

「そうか。」

まあ、内務省君の総統デビューだ。好きにやれ」

爺さんは俺の持つ総統の記憶について考え込み、適当なことを言い放つ。

俺に出来ることはその記憶を探り、少しでも総統ぶるだけのようなのだ。

再び、先ほどの男が戻り、二人の軍人を連れてくる。

初老の方がドイツ海軍再生の父、レーダー元帥で、若い方は副官だろう。

二人は優雅な敬礼をした。そしてレーダーはチラツと俺の側に立つ爺さんを見る。

俺の計画では爺さんを元帥の後ろに立たせ、目で助言させるつもりだったのだが脆くも崩れ去った。

「彼の警護に親衛隊員を2名付けよ、それから食事などを与えてやれ」

「分かりました。どうぞこちらへ」

二人が立ち去り、俺はドイツ海軍の指導者と一人で立ち向かった。

いや、その前に総統としての俺は、何の為に彼を呼んだのだろうか。

俺がどう話題を提供しようか悩んでいると、レーダー元帥が切り出した。

「我が総統。海軍総司令部からご報告いたします。
チチリアクス中将率いるブレスト在泊艦隊は、出撃の準備を完了
させました。

この結果、海軍はツェルベルス作戦をいつでも実行でき、総統の
御命令があり次第、艦隊は万難を排してドイツ本土に帰還するでし
よう」

ツェルベルス作戦？、ブレスト？

確か、ドイツ艦隊がイギリス海峡を横切って、フランスのブレス
トからキールに撤退するんだったな。

地獄の番犬作戦に関するレーダーの熱弁は、俺にとってどうでも
いい話だ。

せいぜい頑張ってくれと思うわない。

「レーダー元帥。準備が完全に整ったということかね」

「いえ。空軍の準備が非常に遅れています。

これは空軍参謀本部の不手際の責任ですが、何とか戦闘機隊総監
ガーラント大佐と第3航空艦隊参謀長コラー大佐の尽力で、改善さ
れつつあるそうです」

「分かった」

俺はあっさりと頷いた。

何故かリーダー元帥の顔は驚いた表情を浮かべる。

彼は続けた。

「お持ちした作戦参加部隊の詳細なデータは如何いたしますか」

「ご苦勞。机に置いておいてくれ」

俺は机を指し示した。だが、何か変なのか？

元帥と副官が、啞然とした表情を浮かべている。

二人は直ぐに表情を取り繕った。

副官もすぐに仕事を思い出し、抱える黒い鞆から書類を机に置く。

「フォン・プットカマー大佐は席を外してくれ。

私は二人で話をしたい」

フォン・プットカマー大佐、総統付き海軍補佐官。
総統直屬の連絡武官だ。

「はっ、退席して宜しいでしょうか総統」

俺が頷くと、リーダー元帥と二人きりになった。

リーダー元帥は、ゆっくりと語りかけてくる。

「失礼ですが。今日は何か心配事でもあるのですか」

「どう意味かな」

「いえ、心ここにあるずと感じただけです」

「そうか、余は戦争の行く末について思いを馳せていたかもしれない」

「ご心労は良くわかります。

我が総統はただでさえ忙し過ぎるように感じます。

せめて、兼任なさっている陸軍総司令官の地位を、誰か信頼できる者に譲れないのでしょうか」

これについて、アドルフの記憶がある。

どうやら先月、アドルフは陸軍総司令官フォン・ブラウヒッチュを解任していたようだ。

それからひと月以上、アドルフは陸軍総司令官を兼任していた。

それ以前も殺人的スケジュールをぬって、東部戦線の各連隊の動きにまで口を出し、後退する師団長達には直接の死守命令を出しまくっていた。

これに加えて最近、第三帝国総統兼陸軍総司令官として、プロイセン伝統のユニカーをおちよくりながら同じことをしている。

今や、アドルフの日課には、東プロイセンから前線に死守命令や励ましの電話をかけまくることまである。

この為、狼の砦と言う秘匿名を与えられた大本営には、せめてアドルフから陸軍総司令官の地位を奪おうと、將軍達がひっきりなし

にやってくるようだ。

「陸軍総司令官については余も考えている。
だが、今は駄目だレーダー元帥」

彼は断られたにもかかわらず、少し頬を緩ませている。

恐らくは、考えているという妥協の言葉を得たからだろうか。

いや、それよりも総統は、弱気だと思われたのかもしれない。
こうなったら強気でいくしかないのか。

俺としては、少しでもレーダー元帥と海軍に関して、アドルフの
記憶を得てからしたい所だ。

第10話、海軍総司令官

断片的なアドルフの記憶を探りながら、俺は改めて目の前に立つ男を見た。

60歳を超えているレーダーは、とてもそう見えない精悍な顔に、疲れた表情を浮かべている。

激務のせいか。そう思った俺は、還暦を過ぎたレーダー元帥に、椅子を勧めようとして思い直した。

俺の直感が、長居の原因になりそうな、椅子に座らせるなど言っている。

まあ、彼に総統らしさを見せたい欲求もあるが、今日の所はさつさと帰って貰うことにしよう。

「さて、話はこれだけだったかなレーダー元帥」

俺の早く去れという意味にレーダー元帥は、微動だにせず受け流した。

「我が総統から、ツェルベルス作戦についてのご質問がなければ、幾つか海軍の考えをお聞き願いたいのですが」

食い下がったレーダーに俺は不機嫌な顔を向ける。

総統様の真意を、海軍総司令官にまで上り詰めたレーダーが読みとれないものか。

内心の不満を隠して、俺は頷いた。

「先月のアメリカ参戦によって、海軍は戦略を転換する必要性を検討してまいりました。

その結果、西部戦線、地中海戦域を軽視することは余りに危険過ぎかと思えます。

海軍は改めて、地中海のマルタ島を早期に攻略すべきと具申致します」

レーダー元帥は何食わぬ顔で切り出したが、同じ主張を何度アドルフにしたのだろうか。

それにしても、現在の西部戦線及び地中海戦域は、まだアメリカの本格介入前のはず。

それを大半の第3帝国首脳部は、東部戦線に比べればそよ風と認識していた。

アメリカ軍の力を知る俺だって、イギリス軍の奮闘も嵐の前の静けさとは思えない。

だから、今の内に西部及び南部戦線で、少しでもイニシアチブを取りたいという、レーダーの気持ちは痛いほど分かる。

「分かっている元帥。

これまでも海軍が、ロンメルへの支援を何とか増やそうと努力してきたこと。

そして、マルタ島とスエズ運河を今まで以上に重要視する理由も、余は理解している積もりだ」

レーダーは俺のリップサービスと労りを込めた言葉を、逆に警戒したようで、やや身構えた。

いや、身構えられても、実際の所、今日は海軍の戦略など、考える余裕などないのだが……。

「何度も同じ話をして、申し訳ありません。

しかしながら海軍には、マルタ攻略準備を急がせるべきと、判断する材料があります。

まず、イタリア潜水艦部隊が、アレキサンドリア港への奇襲攻撃を、成功させた点です。

イギリスの戦艦2隻が行動不能になったことは、相対的に枢軸軍の海軍力を高めました。

また、北アフリカのロンメル大將が、キナレイカ制圧作戦に邁進している点も見逃せません。

それが成功した時こそ、マルタ島攻略の最大のチャンスになると、海軍は考えます」

レーダー元帥は静かに、だが何故か力強く感じる声で促してきた。

思わず頷きそうになる。

連合軍にアメリカ海軍が加わった以上、独伊海軍が今より優位になる可能性はないだろう。

北アフリカでは、アフリカ装甲集団のロンメル大將が、マルタ島から海を挟んで、南東に位置するキナレイカへ、攻勢をかけている。

ロンメルは、昨年一度、キナレイカ北東部にある港街トブルクを包囲し、エジプト国境まで攻めた。

結局、そこで攻勢限界に達し。

さらに英軍の反攻に遭い、トリポリタニアまで後退してきた。そして増援を得たことで、再びキナレイカへ攻め込んでいた。

間もなくベンガジが落ちるだろうし、キナレイカ西部沿岸部の制圧が、マルタ島攻略のひとつの機会であることは確かだ。

まあ、マルタ島攻略は軍人ならば誰でも考えるだろう。

もっと言えば、あのイタリア軍の提督だって、砂浜で日焼けしながら、ワイングラスを片手に、あれは邪魔な島だと叫ぶことは可能なのだ。

問題は、ヨーロッパ枢軸軍にマルタを落とす余力があるのか、或いは他を犠牲にしてまで落とすべき価値はあるのか、やはり詳細を調べなければならないか。

「マルタ島を落とすには海軍だけでなく、かなりの航空兵力を必要とするだろうな」

結局、俺は総統という立場の高揚感と好奇心に負けて尋ねてしまった。

「はい、仰るように同地のケッセルリンク空軍元帥は、相当数の航空機を必要とするでしょう。」

そして海軍は地中海の作戦である以上、イタリア艦隊を主力に頼らざる負えません。

我が総統には、練度の低い彼らを少しでも鍛える為、戦略予備から是非とも訓練用の重油を割いて頂きたいのです」

「イタリア海軍に燃料……」

レーダー元帥の本題はひょっとして、イタリア海軍の為に燃料の無心することだったのか。

イタリア海軍に対して、貴重であろう燃料を献上することに、俺は漠然と勿体無く感じる。

これは果たして、悪しき先入観なのだろうか。

「彼らの能力に疑問をお持ちかもしれません」

俺は気づいたら、大きく頷いていた。レーダーは少し顔を引き締めたようだ。

「ですが、イタリア海軍はアレキサンドリア港で、勇氣と能力を我々に示しました。

今度は、ドイツが彼らに燃料で応えるべきでしょう」

イタリアなんてそれこそ知ったことかと思っていたが、地中海では彼らを使っしかないみたいだ。

「レーダー元帥の意見は分かった。

とにかく、陸軍及び空軍にも、マルタ島攻略を検討させよう」

「はっ、ありがとうございます」

レーダーはまだ何か言い足りないようだが、礼を言って引き下がつた。

彼は敬礼すると退室していく。

俺は総統デビュー戦に勝利した気分だ。

そして、この後、自由な時間を勝ち取れば、更なる大勝利と言えるだろう。

第11話、蹉跎

俺は独りになっても威勢良く、勝利、勝利と自らに言い聞かせる。

素直に白状すれば、海軍という大組織を束ねるレーダー元帥との初見は、元々28歳だった俺に想像を超えるストレスを残していた。

今必要なのは、明らかに安らぎだ。

例え性格に難があっても、日本語で話し合える爺さんの存在しか思いつかない。

机の上にある電話を使い、秘書に命令を下せば直ぐに連れてくるだろう。

そこで一旦急停止した俺は、正しい使い方を知らない電話機を一瞥する。

そして、もつと確実な方法を取ることを選ぶ。

即ち、この手で執務室の扉を開けたのだ。

そこには、目的の女性秘書と黒い軍服を着た年配の男が居た。

彼は俺に気づくと拳を上げた。

「ジーク・ハイル」

気合いの入った挨拶に、面食らいながら俺も反射的に手を上げた。

「……ああ、おはよう」

「おはようございます。我が総統」

名前を知らない男は、制服からして軍人なのだろう。
困ったことに、彼に関するアドルフの記憶が見当たらない。

仕方なく目を細めて、気分だけでも鋭い視線で彼を観察してみる。
どうやら目の前に立つ人物を、軍人と結論付けたのは時期尚早だったようだ。

一見すると黒い軍服なのだが、左腕に鍵十字のワッペンがついている。

ハーケンクロイツは、ナチスの証であり、挨拶もナチス式敬礼。それらを考慮して俺は断定した。

彼は、ヒムラー以外の数十万人いる親衛隊員の誰かであると。

ふつ、何故ヒムラー以外だって、自慢じゃないが、俺はヒムラーの顔を知っているのだ。

もっとも、シャーロック・ホームズでない俺の推理は、ここで行き詰まってしまった。

「今日は上機嫌のようですね。
海軍総司令官は良い報告でも持ち込みましたかな」

お世辞か。

さつきレーダー元帥から、『調子悪そう』なんて言われたばかりだ。

「レーダー元帥は、フランスにいる艦隊のひとつが、出撃準備を整えたという報告を持ってきた」

俺は事実を曖昧に口にしながら、仕方なく彼を執務室にいざなっ

た。

口の中は苦い。自由時間どころか、爺との会話時間すら得られなかった。

「ほう、ひょっとしてツエルベルス作戦のことですかな」

「そうだ。作戦の準備は幾つかの障害を除き、整いつつあるある
そうだ」

「それは何よりの朗報。おめでとうございます」

何がめでたいのか、俺にはさっぱり分からない。

「それで、何の話だ」

「はっ、日本軍のシンガポール進撃について、国際的な影響の調査報告をお持ちしました。

マレー半島の戦況の方は、国防軍作戦部長ヨードル大将が持つてまいります」

「そうか。ご苦労だった。

日本はどうなっている」

やはり祖国は気になる。そして彼が、何故か一瞬ためらい見せたことも気になる。

「申し訳ありません。

駐日本大使館の失態については、外務長官として総統にお詫びするしかありません」

外務省長官……。

まさかこの男がソ連と不可侵条約を結んだ、あの有名なリップントロップだったとは。

いや、外務長官が親衛隊の制服を着ているとは普通思わないよな。

「失態か」

「はい昨年10月以来のコミンテルンスパイ行為発覚で、ゾルゲ一党の暗躍を許した日本大使館は混乱をしています。

目下、この件に関して外務省は、現地の防諜を取り仕切る親衛隊情報部と共に、全力を挙げて調査を進めている所です」

はっ？。ゾルゲつてもう逮捕されていたのか？。

いや、まさか、あれだけ偉そうに日本再生計画を語っていた爺が、ゾルゲの逮捕日を知らなかったとは……。

どれだけ抜けているんだ、あの爺さん。

まあ、爺さんが何もしなくても、日本は快進撃を続けるだろう。

「リップントロップ外務長官は、駐日本大使館について、確実な調査を急いで進めてくれたまえ」

「はい。お任せ下さい」

この後、リップントロップは去ったが、ゾルゲ逮捕の事実を知った今、爺さんと話をするのもストレスになりそうだ。

第12話、決断と犠牲

そして現実には、爺さんとの再会はやはり愉快的話にならなかった。

「そんな馬鹿な」

ゾルゲの話聞いた爺さんは顔を青くして叫び、椅子に座り込んだ。

こつちも慰めて貰いたいところだが、俺は自分より遙かに年長の男に声をかけた。

「爺さん、勘違いなど誰にでもある。

まだ、日本の暗号が解読されている件もある。

俺も多少は助けてやる」

爺さんは急に顔をあげた。

「約束じゃ」

「ああ、分かった」

単純な爺さんは立ち直った。

今度は、より深刻な俺の相談を受けてくれるだろう。

「大問題があった。アドルフの未来の奥さんについてだ」

すっかり忘れていたのだ。ついさっき思い出し調べた所、ここに居ると分かった。

「エヴァ・ブラウンか。

理由を付けて別れるしかあるまい」

「どうやって？、どんな理由で別れたらいいのか教えてくれ」

「そんなこと、嫌いになったとか、性格の不一致とかあるだろうに」

これも早期に手を打たなければならない。

とりあえず俺は別れ話を避けた。

そして、明日の朝一番にブラウンさん旅行をいう名の疎開に送り出しす命令を出した。

すぐに秘書は、俺の命令に従い、いぶかりながらも旅行を手配する。

しばらくして、扉の外が騒がしくなる。

勢いよく開いた扉には、20代後半くらいの女性がいた。

恐らくエヴァ・ブラウンだろう。

俺は冷ややかに口を開いた。

「今は公務中だ」

「公務など、この書類の理由を説明したら、幾らでもやればいいわ」

恐ろしい剣幕だ。何か怒っているみたいだ。

俺が爺さんの提案に飛びついたのは、彼女に会わないで済むからだ。

怒れる女性と話すことになると分かっていたら、自分で穏やかに話す方を選んだだろう。

「書類？」

俺は彼女から書類を受け取り、素早く読む。

「総統命令だ。エヴァ・ブラウンの住居をベルクホーフに移す」

ベルクホーフは総統大本営の機能を有する別荘だ。

確かに俺の意図は書類の通り。

だが俺は間違いなく旅行を名目にして、彼女をまずここから去って貰うよう命令した。

だから、どこで手順が狂ったか疑問だ。

そして、この書類を読めば、ブラウンさんの怒りもわかる。

だが、俺も譲れない。

「これは決定だ。勿論、どこか安全に住める別の場所があれば、誰かに申しでくれ」

彼女はヒステリックになりつつある。

「親衛隊員。彼女を最優先で部屋へお連れしろ。丁重にだ」

突っ立ってる役立たずに目をつけた俺は命令した。

やがて、彼女の叫び声と周りの冷たい視線、そして俺に多大な罪悪感を残して、危機は去った

俺はこの大失態を演じた男の秘書を睨みつつ、声をかけた。

「旅行はなしだ。彼女は直ぐに引越す」

騒ぎで集まった者は皆、何かを言いたげな表情こそ浮かべたが、相手を最高権力者と思い出したのか黙ったまま去った。

執務室に残された俺は再び爺さんと二人きりに戻る。

やがて爺さんは口を開いた。

「可哀想にの。彼女は何も知らない犠牲者じゃ」

そんなことは分かっている。だが空気を読めたら、俺を慰めるだろうに。

新生日本国で多数を占めるに至った、安月給公務員の俺の方がよっぽど空気を読める。

「ああ、彼女には悪いことをした」

「我々は彼女を犠牲にする。成果を出さねばの」

分かっているさ俺だって。爺さんの挑発に乗るわけではないが、やってやるさ。

俺は覚悟を決め、最初にできなかった勉強時間の確保に乗り出し

た。

その為、最優先の緊急事態以外、会議や面会をキャンセルした。
そして、ひたすら情報を集めにかかったのだ。

時間はない。チャンスも少ない。だが知識の恩恵は計り知れない
可能性を秘めている。

第13話、始動

西暦1942年2月1日早朝6時。 總統大本営にて……。

ドイツ第3帝国總統アドルフ・ヒトラーと呼ばれる男は、改革案を胸に秘め、新たな歴史を切り開こうとしていた。

今日、總統大本営・狼の砦は、帝国全域の要人達を迎えている。總統にとってこれは、膨大な数の面会と会議の開催を意味していた。

執務室で最初の面会を待つ總統は、なにやら落ちつかない様子だ。

室内を歩き回っては立ち止まり、画家志望のアドルフによって厳選された絵画に、ため息を吹きかける。

そんな總統を落ち着かせようと同室者は声をかけた。

「いよいよじゃな」

東洋系の顔立ちをした初老の男に、馴れ馴れしく声をかけられた總統は、怒ることもなくその言葉を自然に受け入れた。

「ああ、そうだな。」

ただ俺の方は、嫌な予感がいよいよ止まらない」

「ふん、そんなことを気にしたところで、何も変わるまい」

近頃、總統執務室に度々招かれる東洋人は素っ気なく指摘する。

「分かっている。

ただ、ルビコンを渡る根回しは、もう少し時間をかけるべきだと思うてな」

非常に弱気な発言だ。

「やれやれ、昨日までの頼もしい総統は何処へいった。

僕は総統から何度も、早期に改革を開始する為に、アドルフの権力と新法を信じるしかない、聞かされたぞ」

老人の言う新法とは、全権委任法を根拠に昨日制定された全権指令法のことだ。

全権委任法がヒトラー政権にとって、権力の源泉であるならば、全権指令法はその溢れでた権力に方向性を決める水路である。

今までも似た同種の制度はあったかもしれない。

だが全権指令法で定められた新・總統国家指令は、単なる指令に留まらず、国家元首のまぎれもない勅令だ。

この指令こそが、改革に進む総統にとって協力な武器となるはずだ。

ただ、その事実を思い出させたことで、東洋人、いや日本人は總統の気分をはなはだ害した。

「爺さん、あれは自分に言い聞かせていたんだ」

「そうなのかね。だとしても總統が今更ルビコンを渡るのを春秋した所で、何の意味もないだろう」

爺さんの揶揄に、總統は苦笑いを浮かべた。

「……そうだ。確かに俺は決断した」

總統は力強く何度か頷きながら、決意を語った。

その總統はこれまでの戦略や政策、権力構造或いは慣習にメスを入れようと画策していた。

何よりもドイツは総力戦への移行を急務としていた。

アメリカ、イギリス、ソ連を敵に回している以上、生産力で勝ち目はない。

だが、少しでもその差を埋め、軍需生産を増強させることこそが總統の最大の義務だ。

そして、總統個人は人権問題の改善を急務としていた。

そこで、かねてより気にしていたユダヤ人等に対する人権問題を、總統は軍需工場の労働力不足にリンクさせたのだ。

なぜなら、後世ならば最優先になる人権問題も、この時代の戦時ではそうそう振り回せるものではない。

だが、労働力を大義名分とすれば、ユダヤ人等の待遇の改善に大きな根拠を持つと考えたのである。

上手くいけば、労働力は確保され、人権問題も改善される。まさ

に一石二鳥といえよう。

そして総統は、弾圧の最大の当事者である親衛隊に、人権問題を担当させる賭けにでたのだった。

「ヒムラー親衛隊長官がいらっしやいました」

女性秘書が名を挙げたハインリヒ・ヒムラーは、警察と親衛隊を司るナチス・ドイツの重要人物である。

その権限は帝国において絶大で、治安、情報など多岐に渡っている。

彼は基本的に人権問題において、絶滅主義の推進者と言われると同時に、労働力問題では冷徹な現実主義者でもある。

実際の所、どういう人物であろうと、親衛隊長官である彼の忠誠が、今後の改革に必要不可欠であった。

老人と秘書を見送って、総統は冷酷無比である親衛隊長官ヒムラーと向きあった。

「ハイル・ヒトラー」

ヒムラーのナチス式挨拶に総統も普段通り応え、近況を聞く。

「ハインリヒ。バイエルンはどうだった？」

ヒムラーは視察先のミュンヘンから、直接狼の砦に来了。

ヒムラーの面食らった顔を楽しむ余裕こそないが、総統は話題を

天気や世間話に集中し、予定通り彼を苛立たせる。

ヒムラーは我慢強く耐えていたが、遂にたまりかねて本題に入ろうとした。

「我が総統。何か緊急事態が起こったのでしょうか？
狼の皆で会う者達全員が、誰も今日の緊急招集の用件を知らません」

「誰も知らないのは当然だ。最初に知ったのは、ハインリヒ、君だからな」

ヒムラーは苛立ちを冷やすように、少しの時間だけ硬直した。
やがて、その反動が、真面目そうな彼の顔に嬉しそうな笑顔が微かに浮かぶ。

「よろしいのですか我が総統。ボルマンは顔を真っ青にして、理由を知らないかと尋ね回っていましたよ」

ヒムラー長官は堅い顔に笑顔を浮かべ、ライバルである官房長官ボルマンの動揺を皮肉った。

実際の所、右往左往していたのはヒムラーも一緒だ。
最初に総統執務室へ通される理由が、良いものであるとは限らないからだ。

だが、一連の総統との会話でヒムラーは、総統の側近中の側近ボルマンを出し抜いたことを知った。

「安心するが良い。彼もすぐに理由を知るだろう」

そして、総統はその彼の心を確実に掴み、利用しようとしていた。

「我が忠臣にして、誠実なるハインリヒよ。

国家社会主義ドイツ労働党は、ゲルマン民族を確実な勝利へと導かねばならない。

その為にも、我々は生まれ変わらなければならないのだ」

総統は今のままで勝利することなど到底不可能と、暗に告げた。

「全く同感です我が総統。全ドイツは常に最高の勝利を目指しています。

しかし、中には道に迷う者も出てくるでしょう」

「そうだ。……正しい道を余は示さなければならない。

そのためには、親衛隊、警察の力が今まで以上に重要なことは言うまでもない。

余はかつてないほど、親衛隊長官の絶対的忠誠を必要としているのだ」

ヒムラーは総統の言葉に威儀を正した。

「ハイル・ヒトラー!。

親衛隊は我が総統の為ならば、何時でも命を捧げる覚悟です」

ヒムラーは再び拳を突き上げ、忠誠を示した。

「ハインリヒ……。そなたの忠誠に感謝しよう」

総統がヒムラーに手を差し出すと、彼は驚きつつも、すがりつく

ように總統の手を握った。

「よく聞けハインリヒ。

今や全ドイツは、我が愛するゲルマン民族を守る点に、全力を拳げるべきだ。

その為にも、我が命令が速やかに、そして解釈の余地なく末端まで実施されなければならない」

「お任せ下さい。親衛隊は如何なる困難な命令も確実に遂行致します」

「ハインリヒいや、ヒムラー親衛隊長官」

「はい」

「余は新・總統国家指令第1号の遂行を親衛隊長官を発令することを決断した」

――新・總統国家指令第1号――

1、近代戦争の要は生産力にある。しかるに現在、国内産業は深刻な労働力不足に陥っている。

2、全ドイツは労働力増大にある力を注ぎ込まねばならない。

3、この為、隔離政策で就業規制されているユダヤ人は、今後労働力として活用される。

付帯指令3・1、全ドイツのユダヤ人は、マダガスカル島占領まで、貴重な労働力として活用される。

付帯指令3・2、兵器・弾薬省はユダヤ人を速やかに労働力として活用し、最低限の対価を払うこと

付帯指令3・3、兵器・弾薬省と親衛隊は協力して、ユダヤ人の待遇改善を図ること。

4、新・總統国家指令1号の実行責任者として、余は親衛隊長官ヒムラーに全権を委任する。

1942年2月1日。

全ドイツ總統アドルフ・ヒトラー

總統から新しい驚天動地な指令を受けたヒムラーだったが、何とか冷静さを崩さずに答えた。

「ご命令承りました」

その言葉に總統は安心したように頷いた。

だが、親衛隊長官ヒムラーは、一点だけ疑問を口にする。

「ハイドリヒ親衛隊大将やボルマン官房長は、ユダヤ人問題から外れると理解して宜しいのでしょうか」

ハイドリヒ親衛隊大将とは、ヒムラー麾下の国家保安本部長官である。

国家保安本部は、親衛隊情報部や悪名高きゲシュタポを傘下に持つ。

当初、総統はユダヤ人虐殺推進派のハイドリヒを、排除すると決めていた。

だが、新・総統国家指令の実行に遅れが生じることを恐れ、人事を見送ったのだ。

「ボルマンとは仲良くしたまえ」

一瞬ヒムラーは凄じい嫌そうな顔を浮かべたが、総統は構わず話を続けた。

「ハイドリヒはこの件から外す。

彼は保安任務に専念すべきだ」

彼が他の問題で権力を握る間に、国家保安本部麾下の親衛隊情報部は、日本で重要なスパイを見逃していた。

「仰る通りです、我が総統。ハイドリヒについては私も同感です」

「よろしい。それから指令第1号には、君宛ての機密指令もある」

「新・総統国家指令1号、機密指令第3項、4条」

3・4、ドイツはアメリカとの和平を模索する必要がある。

補足3・4・1、ユダヤ人はアメリカに多大な影響力を有する。

補足命令3・4・2、この為親衛隊は、全ユダヤ人のあらゆる安全を、秘密履に確保しなければならない。

「……はい」

小さな返事を聞き、総統は穏やかな表情を浮かべると、ヒムラーにゆっくり考える時間を与える。

今日の総統は多忙であるが、ヒムラーの忠誠心こそ、改革に必要不可欠と見極めていた。

「ハインリヒ。何か意見はあるか」

「はい。親衛隊は総統の命令を完遂し、抵抗する者は排除されることをお約束します」

ヒムラーは約束した。

そもそもかつて彼は現実主義を示し、ユダヤ人を生産現場へ投入するよう主張していた。

総統はそれを知ったうえで彼を責任者にしたのだ。

第14話、SS長官

ソ連兵捕虜は総統にとって、頭の痛い問題だった。

軍は彼らを持て余し、というより構う余裕が全くないまま放置していた。

総統は仕方なく、ソ連兵捕虜もヒムラーに押し付けようと決断していた。

「ソ連兵捕虜は厄介だが、同時に貴重な労働力でもある。

余としても現状の改善を図らざる負えない」

「お言葉ですが、我が総統。我々の輸送力に問題がある以上、この問題の改善は非常に困難です」

「分かっている長官。

だが勝利の為に、誰かが改善をしなければならない。

そこで余は新・総統国家指令第2号の遂行を発令することにした」

――新・総統国家指令第2号――

1、近代戦争の要は生産力にある。しかるに現在、国内産業は深刻な労働力不足に陥っている。

2、この為、全ドイツは労働力増大にあるゆる力を注ぎ込まねば

ならない。

3、ソ連兵捕虜は労働力として活用する。

付帯指令3・1、陸軍野戦憲兵隊は、捕虜の健康に留意しつつ、早期に後方へ移送し親衛隊に引き渡すこと。

付帯指令3・2、親衛隊はソ連兵捕虜の健康に留意して収容すること。

付帯指令3・3、兵器・弾薬省は速やかにソ連兵捕虜を労働力に編入すること

付帯指令3・4、兵器・弾薬省及び国防軍、親衛隊は協力して、ソ連兵捕虜の待遇に留意する義務を負う。

秘密指令3・5、親衛隊及び陸軍は、ソ連兵捕虜から積極的協力者を募ること。

秘密指令3・6、ソ連兵捕虜の積極的協力者は、国防軍情報局の管轄とする。

4、余は新・總統国家指令2号の実行責任者として、親衛隊長官ヒムラーを任命し、全権限を委任する。

1942年、2月1日。

全ドイツ總統アドルフ・ヒトラー

ヒムラーは書類を読み、困難な仕事を押しつけられたことを知った。

にも関わらず、彼の表情はわずかに緩んだだけだ。

彼は帝国に奉仕をしたいのだ。

そして親衛隊が国防軍とゲーリングから捕虜の管理を少しでも奪うことも、より帝国の為になると心から信じているのだろう。

「私がソ連兵捕虜を担当するのですか」

ヒムラーはゆっくりと、疑問を口にした。

それに総統は「そうだ」とだけ答え、元々管理能力に疑問符のつくゲーリングのことを、言及しなかった。

「捕虜は最終的に幾つかのグループに分けられるだろう。

積極的協力者、消極的協力者、非協力者。それぞれの退偶を考えねばならない」

総統はヒムラーの目を見つめ続け、有無を言わさぬ口調で断言した。

「お任せ下さい。早急に制度を作り上げ、まとめてまいります」

ヒムラーはすぐに確約した。

親衛隊の力とヒムラーの組織運営力を持つてすれば、効率的、かつ安価な捕虜収容制度はきつとすぐに構築されるだろう……。

一応の満足を表した総統は、次なる話を慎重に切り出そうとした。

東方の占領政策もまた、治安を司るヒムラーを抜きにして語れないが、今度は親衛隊の権限を削る政策になる。

現在、占領したソ連領は大まかに軍政をゲーリング、治安をゲーリングとヒムラー、占領地の経営を大管区の指導者達と東方占領地担当長官のローゼンベルクそして……ゲーリングがそれぞれ担っていた。

東方占領地の名目的最高位は、軍政を担当するゲーリングである。そして次席は行政や占領政策を担当する東方担当長官ローゼンベルクになっていた。

だが、ナチスにおけるアドルフの人事が、権力の均衡に主眼を置き、複数の担当者を置く中、政治力のないローゼンベルクの実権は形骸化していった。

例えばウクライナでは、搾取政策を推し進める大管区指導者コッホが、ボルマンと結託して権力を振るっている。

ゲーリングはゲーリングで他の省と協力して、ウクライナの軍政をローゼンベルクの管轄にまで拡大した。

治安もヒムラーの親衛隊が強権政策を勝手に推し進めている。

そして外務省は、東方占領担当省そのものを認めず、吸収しようと画策していた。

今やローゼンベルクは、自らの主張をアドルフに述べるだけの存

在になりつつあった。

だが、そのローゼンベルク東方担当長官の主張には、多民族の取り込みが含まれ、融和政策を進めたい総統には都合のよい存在だ。

ただ問題がない訳でもない、特にローゼンベルクがユダヤ人だけを抹殺しようと目論んでいることは見逃せない。

何と言ってもユダヤ人の保護を盛り込んだ指令第1号を守れない者に、東方占領地の現状の改善を模索する新・総統国家指令第3号は任せられなかった。

「東方占領地の治安悪化は、陸軍に多大な負担をかけつつある」

ただでさえ広大なロシアでは、後方の面どころか線を維持することだけでも、多大な労力を必要としている。

加えて占領政策の成否によっては、バルチザンを増大させ、治安を崩壊させる可能性すらある。

「仰る通りです。」

後方を管理する親衛隊の人員も限られ、現状では全く足りていません」

「そうだ……。余としては、ウクライナの反感を和らげる為に、自治権を与えたいと思う」

「宜しいのですか、東方植民は総統の悲願だったはずですよ」

アドルフは、ウクライナにドイツ人を入植させることを夢見てい

た。

だが、現実の総統に必要な物は、ビスマルクの言うところの『鉄と血』である。

「無論、ドイツの傀儡政権としての独立であり、ウクライナの範囲も我々ドイツが決める。

ただ、問題は責任者だ」

総統の責任者という言葉に、ヒムラーは反応した。

「ローゼンベルク長官は確か……、ウクライナへ自治権を与えることに熱心ですな」

ヒムラーは彼の考え方が総統に近いことを認めた。

ただ、口にはこそしないがヒムラーにとって、ウクライナを独立させ後の権限のバランスがより重要だった。

独立或いは自治となれば、当然外務省はより大きな権限を求めるだろう。

そして、権限を縮小化される東方大管区の指導者達も、今まで以上にボルマンを頼るかもしれない。

ウクライナいや、東方占領地は、ナチス指導部の火薬庫になりかねないのだ。

そこでヒムラーはボルマン官房長官の権力を抑え、さらに東方を安定させることが、自分と総統そして帝国の利益となると考えた。

そのヒムラーの答えは、官房長ボルマンに好き勝手な行動を許さない人材を、総統に推薦することだ。

「ローゼンベルクはユダヤ人への弾圧にも熱心過ぎ、また思想はともかく統治能力に疑問があります」

ヒムラーは、ローゼンベルクの行政能力に疑問を投げかけ、総統の表情をうかがう。

「余も同感だ。誰かをローゼンベルク長官に代わる人材を見つけるか、有能な補佐を見つけないならならぬ」

総統の言葉にヒムラーは自信ありげに答えた。

「前外務長官フォン・ノイラート男爵なら新しいウクライナ大区指導者に適任かと思います」

「ほう、フォン・ノイラートか……」

前外務長官の彼は、外務省に影響力を残していて、外務長官リッペントロップにも睨みがきく。

また初代ベーメン・メーレン保護領総督として、統治政策に携わっている。

チェコでは強硬派の突き上げを抑えて、穏健占領政策を推し進めた実績もある。

もつとも、独ソ開戦後にチェコの抵抗が激化すると、穏健政策の不備を指摘され、抵抗運動の徹底弾圧をした副総督のハイドリヒに

取って代わられた。

ノイラートの名を聞いた総統は、まるで存在そのものを思い出すかのように考え込む。

それをヒムラーは不同意と捉えたようだ。

「ローゼンベルクの思想を現実の物にするには、ウクライナの親独派の信頼を得る必要があります。」

このままでは、東方占領地に住む人々のほとんどが、敵になります。

ですがフォン・ノイラートならば、その数を間違いなく減らせるでしょう」

既にバルチザンの発生は不可避であり、そしてウクライナは広大だ。

弾圧しきれない以上、遅ればせながら少しでも懐柔するしかない。

それには彼こそふさわしいという熱心な説得に、フォン・ノイラートをよく知らない総統も、最終的に同意した。

直ぐ様、新・総統国家指令第3号に彼の名を記す。

「ハインリヒ、発令は後ほどローゼンベルクの前で行う」

総統は発令を数時間後の会議にすると告げた。

そして、会話の内容を漏らさないよう命令して、ヒムラーを解放

した。

一連の会話で、総統は親衛隊長官ヒムラーのことを、組織の規律を重視し、上級者の命令に確実に従う男と暫定的に判断した。

それでも、親衛隊長官ヒムラーに人権問題を担当させたことは、総統を複雑な心境にさせただろう。

いずれにせよ、新・総統国家指令第1号から第3号の成果は、数ヶ月経たないと分からない。

ヒムラーが献身的に努力して、最大限に親衛隊を統制しても、相手の抵抗で失敗する可能性もある。

これに今の総統ができることは、不幸な事態が減るように祈ることだけだった。

第15話、まだヘルマン？

ヘルマン・ゲーリングは言わずと知れた第3帝国のNo.2である。

ナチスの最重要人物だったということもあり、総統のいた世界でもその評価は芳しくない。

だが大半の人がそうであるように、ゲーリングもまた生涯に多くの顔を持っていた。

そんな彼が最も光り輝いたのは、やはり第1次世界大戦だろう。

ゲーリングは、ドイツ帝国軍バーデン大公国第112歩兵連隊の陸軍少尉として戦場に立ち、2級鉄十字章を得ている。

やがて彼は航空隊に憧れを抱くことになる。

当時の航空隊はドイツ軍の花形であり、戦闘機パイロット達のエースはドイツ国民のスーパーアイドルだった。

彼らのプロマイドを見てそう思ったわけではないにせよ、ゲーリングは歩兵から偵察機のパイロットになった元同僚に影響を受け、空を飛ぶことを決意した。

当時、後方で休養中だったゲーリングは、溢れでる行動力で勝手に原隊を離れ、航空隊へと居座った。

無論、軍からは出頭命令が次々と発せられ、古巣バーデン大公国

軍でも、ゲーリングは身勝手で我が儘と非難される。

当然敵前逃亡の罪に問われることになるが、若きゲーリング少尉はドイツ帝国政府を動かすほどの有力な後援者を持っていた。

その影響力によってゲーリングの敵前逃亡の罪はもみ消され、航空隊の移籍を認められる。

ただ、勘違いしてはいけない。

ゲーリングは当時もてはやされていた戦闘機パイロットになったわけではない。

彼は友人の操縦する偵察機に便乗する観測員として、航空隊のキヤリアを始めたのだ。

来る日も来る日もゲーリングと友人は、敵の対空砲の中に突入し、航空偵察写真を撮ってきた。

このような偵察写真は陸軍の作戦に多大な影響を与え、軍司令官のヴィルヘルム皇太子に高く評価された。

そして数々の偵察飛行を成功させたことで、ゲーリングは尊敬を込めて「空飛ぶブランコ乗り」と呼ばれるようになる。

あの偵察機の墓場と言われたヴェルダン要塞の航空偵察に成功したのも、ゲーリングと彼の友人だ。

これで彼は一級鉄十字章を得た。

ゲーリング少尉もだんだんと英雄の仲間入りをしつつあった。

そしてゲーリングは偉大なる先駆者フォン・リヒトフォーフェンがそうであるように、偵察隊から念願の戦闘機パイロットに転向し、更なる栄光を掴むことになる。

ゲーリングは件の友人を僚機に持ち、水を得た魚のように活躍した。

次々と撃墜のスコアを伸ばし、空飛ぶブランコ乗りは、新たに「鉄人ヘルマン」の異名を得て、中尉にも昇進する。

彼は騎士十字章を始めとする勲章を総なめにし、遂にドイツ軍人の誉であるブルー・ル・メリット勲章をも手に入れたのだった。

彼は名実ともに英雄になった。

勿論、ドイツ国民から赤い戦闘機乗り、連合軍からレッドバロンと異名得たマンフレート・フォン・リヒトホーフェン大尉にはまだ遠く及ばないにしてもだ。

ゲーリングは25歳の時、戦死したレッドバロンと事故死したライナルトのあとを継ぎ、第一戦闘航空団の三代目司令となる。

第一戦闘航空団は連合軍にフライングサーカスと怖れた部隊で、ドイツの空の守護神である。

そして若きゲーリングは、指揮官として大きな改革を行った。

当時、彼自身も含めたパイロット達は良く言えば騎士、悪く言えばスタンドプレーヤーであった。

それに気づいた彼は扱い難い戦闘機パイロット達をまとめ上げ、物量で勝る連合軍に部隊の連携で対抗し、戦果をあげた。

ドイツの敗戦間際のゲーリングの指導力、そして勇気は何人たりとも真似できないといえよう。

だがドイツ帝国が敗戦を迎えてからしばらく経つと、ゲーリングはアドルフに会い心酔してしまう。

ゲーリングのドイツ航空隊最大の英雄という顔は、アドルフに利用されていくことになる。

そして紆余曲折の末、今や彼はアドルフと共に第3帝国に君臨しているのだ。

今のゲーリングは総統の後継者に指名されるほど有力なナチスのNo.2である。

彼の能力と知名度のある英雄としての顔が、やはりアドルフに信頼されたからだ。

更にゲーリングはドイツ国会議長にして航空省長官、空軍総司令官にとどまらず、四カ年計画全権責任者、森林長官、果ては意味不明な狩猟長官を兼務していた。

ただゲーリングが全ての役職でそれなりの成果をあげている点も確かだ。

ナチス政権の成立に多大な貢献、近代空軍を短期間に創設、人造

石油の量産にメドをつけ、自然を保護して狩猟にルールを作った。

そこそ有能なゲーリングの問題は何にでも手を広げ過ぎることであり、それによって自らの管理能力を超えてしてしまう点だ。

だから、正直に言えば総統は彼の長すぎる役職を幾つか削りたかった。

おそらくダンケルクの失態やイングランド航空戦の敗北直後ならば、彼を幾つかの役職から解任できただろう。

だが、今のように正当な大義名分を持たないまま、無理にゲーリングを解任すれば帝国内に無用の緊張を招きかねない。

仕方なく総統は日本人と代案を幾つか考えた。

その中には国家元帥に似た、ゲーリング用の閣僚職を創る案もある。

狩猟長官の上に国家狩猟長官を創設すれば、きっとゲーリングは嬉し涙を見せるに違いない。

更に部下に十人ほどの狩猟長官を付けてやれば、ゲーリングは虚栄心をくすぐられ、役職が減っても気にしないかもしれない。

あるいは、そう。名画好きのゲーリングは、占領地美術収集長官への任命もきつと喜ぶはず。

そうになったらゲーリングは、一生をかけて占領地で美術品を集めることになっただろう。

だが、実際にこれらの案を進めようとすれば、ゲーリングの激しい反発を覚悟しなければならない。

そして、もう一度言うがゲーリングはそこそこ有能なドイツ国民の英雄だった。

英雄にはアドルフだって迂闊な対応をできなかったし、その論理に総統も従うつもりだった。

そして、そんな総統の内心など知る由のないゲーリングが、巨体を揺らしながら意気軒昂に入ってきた。

そして、挨拶もそこそこに立ったまま報告した。

「我が総統、空軍はツェルベルス作戦の準備を完了しました。

空軍は、いつでも海軍の尻拭いをできます」

「そうかご苦労だった。レーダー元帥からも艦隊の出撃準備が完了したという報告があった。

後は作戦を決行するだけになる」

ゲーリングはレーダーの名を聞くと出し抜かれたと感じたようだ。

だが、彼はやはり自信満々に胸を叩いた。

「空軍の戦果にご期待下さい、我が総統」

総統は苦笑いを隠し、「勿論期待している」と返した。

すると、ゲーリングは顔をほころばせ、一歩前に出て総統に近づいた。

「それからもうひとつ朗報があります。

第一航空艦隊は北方軍集団第16軍に対する空中補給の体制を整えました。

これにより空軍はいつでも陸軍の尻拭いも可能です」

ゲーリングは陸軍を叩くことで総統が喜ぶと思ったようだ。

だが、総統はデミヤンスクに対する空中補給で十万人の命が救われ、ソ連軍の数十個師団を拘束できる見通しを喜んだ。

「よくやった。余は空軍の努力に満足している」

「有難うございます我が総統。空軍は常に万全の体制を取っています」

この言葉に頷いた総統は、この後の展開を想像して身構えた。

案の定、ゲーリングは更に鼻の穴を大きくして、資源の重点配分をアピールしてくる。

「しかしながら空軍の任務は多岐に渡り拡大する一方です。

将来の任務や陸軍の尻拭いに備える為、メッサーシュミット社や

ユンカーズ社に更なる資材を配分して頂きたいものです」

「わかっている。余は空軍の強化を最優先に図るつもりだ。だがその前にやらねばならないことがある」

「如何なることでしょうか」

総統はゲーリングに答えず、ソファアを差し示して座るように促した。

ゲーリングがソファアを軋ませて座ると、その巨体を逆に見下ろした総統は強い口調で切り出した。

「余は陸軍の改革に乗り出すことを決断した」

「それはまた急な話ですな」

空軍の話だと思っていたゲーリングは肩すかしを喰らい、間拔けな声を上げた。

「陸軍が旧態で頑迷ということは以前から分かっていた。

しかし余は陸軍総司令官を兼務して、初めてその真の意味を知ったといえよう。

陸軍参謀本部はあろうことか、国家元首であり国防軍最高司令官である余に、平気な顔で嘘をつき重大な情報を隠蔽していた。

これはまさにドイツ国民に対する卑しい裏切り行為だ」

「仰る通りです。まさに伝統の陸軍も落ちたものです」

「その陸軍の墮落をドイツ総統としては看過できない。

余は陸軍に、彼らが国防軍の一部に過ぎないことを、思い出させねばならない」

アドルフと陸軍は互いの足をよく引つ張りあっていた。

軍の指揮を取りたがるアドルフと干渉を避けたい陸軍。

だが、最高司令官に情報を隠し、幾つかの命令を黙殺した上に多くの危機を招いた責任は重い。

「我が総統は命令し、我ら軍人は従うべきなのに嘆かわしい事態です」

ゲーリングが激しい口調で同意した。

「まず陸軍参謀本部の人事を刷新するつもりだ」

「まさかハルダー上級大将を更迭するのですか」

ゲーリングは空軍のライバルの退場に喜ぶより、陸軍の混乱に若干の不安を覚えたようだ。

「安心したまえ。すぐに参謀総長をハルダーから差し替えることは考えていない。

余は次の陸軍参謀総長の選定を内々に進め、幾つかの人事に介入

するに過ぎない。

しかし、ハルダーに限らず、近代戦の意味を把握できない前大戦の遺物達には、遠からず退場してもらうつもりだ」

「……確かに陸軍の機能不全を回復させることは急務です」

「しかし余は単に陸軍だけを責めるつもりはない。

近代戦に空、陸、海各軍の連携は不可欠である。

余は国防軍最高司令官として、専門外の空軍及び海軍を理解する必要がある」

「そ。それではその、総統はどうされたいのでしょうか」

「勿論、空軍総司令官に余が就任するつもりはない。

だが、できる限り空軍及び航空省の会議に参加し、近代的な空軍について学ぶつもりだ」

「勿論、私は我が総統のご命令には従います」

ゲーリングは総統に空軍を引っ掻き回されることを憂慮したようだ。

だが顔をしかめただけで、首を縦に振ったのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0992q/>

新總統の野望

2011年8月4日11時36分発行